

ほそ や い せき
細 谷 遺 跡

目 次

I 調査の方法と経過	39
II 発見された遺構と遺物	43
III 考察	74
IV まとめ	77
写真図版	

調 査 要 項

遺跡名：細谷B遺跡（ほそやBいせき）（宮城県遺跡地名表記載番号：70028）

遺跡記号：SP

所 在 地：宮城県石巻市桃生町太田字細谷

調査原因：三陸縦貫自動車道建設

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育府文化財保護課

調査期間・面積：

確認調査 平成15年（2003）3月17日～19日

対象面積 10,000m² 調査面積 300m²

事前調査 平成15年（2003）11月12日～12月11日

対象面積 900m² 調査面積 900m²

調査員：確認調査 相原淳一・須田良平・奥山芳明

事前調査 相原淳一・佐久間光平・岩見和泰・奥山芳明・三好秀樹・白崎恵介

I 調査の経過と方法

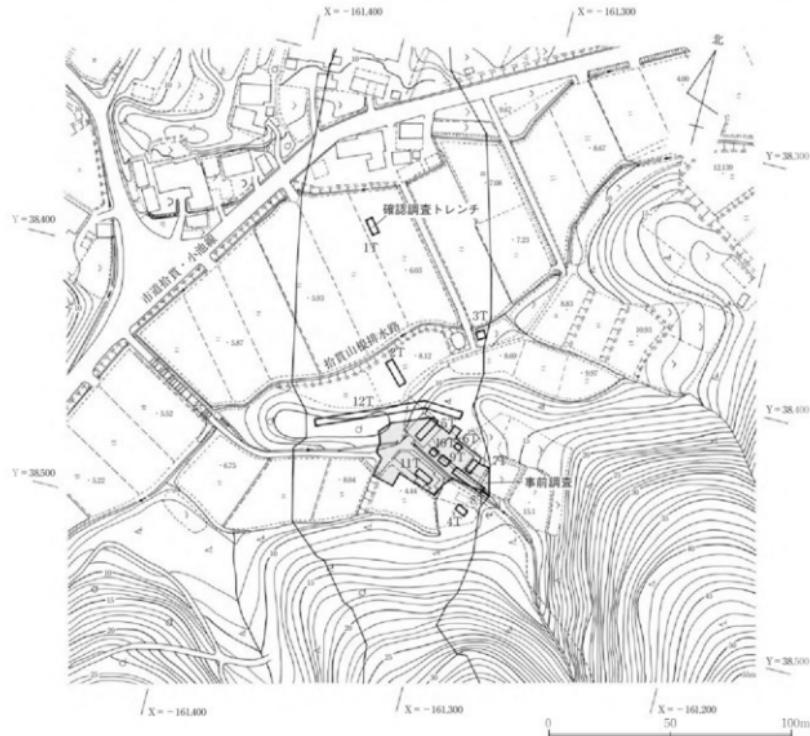
調査の経過

本遺跡は三陸縦貫自動車道建設に先立つ分布調査によって発見され、平成4年に新規に登録された。その後、平成14年度に発掘調査の係る現地協議を行い、その結果に基いて遺跡の範囲と遺構の密度を確認するため、遺物の散布が認められた宅地部分と周辺の沖積地を対象として平成15年3月17日から19日まで確認調査を行った。調査は幅2mで、任意の長さのトレンチを12本設定した（第1図）。

水田などの沖積地には1T～4Tを設定した。いずれの調査区でも層序は表土下に黒褐色土層・灰白色火山灰層・スクモ混じりの暗褐色土層と共通していることを確認したが、遺物・遺構は全く発見されなかった。このため、沖積地は今回の発掘調査対象から除外することにした。

宅地部分には、5T～11Tの7本の調査区を設定した。建物基礎による著しい攪乱によって壊されではいるものの、多数の柱穴と土器埋設遺構1基、竪穴住居跡の周溝の一部と見られる小溝跡1条を確認した。大半の柱穴の形状は円形を基調とするもので、中近世以降の掘立柱建物跡と考えられた。その他少量の土師器・須恵器片が出土した。

西側に張り出す標高約10mの舌状小丘の尾根筋部分には、12Tを設定した。杉・雜木林の薄い表



第1図 調査区の位置

土を剥ぐと、すぐに地山岩盤が露出し、遺構や遺物は確認することができなかった。すでに旧表土は失われていることが判明したため、丘陵尾根筋部分も調査から除外した。

以上の確認調査の成果を踏まえ、平成15年11月12日から12月11日にかけて事前調査を実施した。調査区内は丘陵斜面にあたるため、以下のような堆積層が認められた（第3図）。

I層 表土である。にぶい黄褐色～黄褐色シルト層で、2層に細分される。II層以下の堆積層とは不整合面をなして堆積している。

II層 20cm以上の地山礫を多く含む黄褐色シルト層である。丘陵緩斜面を覆う崖錐性堆積物と考えられる。

III層 炭化物を少量含む褐色シルト層である。旧表土である。

IV層 灰白色火山灰層と、部分的に確認したその上面の炭化物層である。斜面部分では、ブロック状をなし、散漫に分布する。10世紀前葉に降灰した十和田火山灰層と考えられる。IV層は宅地部分ではほとんど削平されて残存しないが、沖積地側の確認トレントレンチ4Tでは面的な分布が確認される。

V層 炭化物を少量含む褐色シルト層である。

VI層 炭化物を少量含む暗褐色～黒褐色シルト層である。丘陵下部では、色調でa・bの2層に細分される。

VII層 褐色～黄褐色に移行するシルト層（9層以下）である。地山岩盤の風化土壤の堆積層で、遺物は含まない。

調査の結果、宅地部分の丘陵南緩斜面で掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土器埋設遺構他を検出（第2図）した。宅地部分の調査であったために、削平・攪乱が著しく、遺構の掘り込み面は必ずしも明らかではないが、掘立柱建物跡の柱穴群がV層を掘り込んでいること、古代の竪穴住居の堆積土をV層が覆っていることを確認している。調査対象面積は宅地部分を中心とした約900mである。

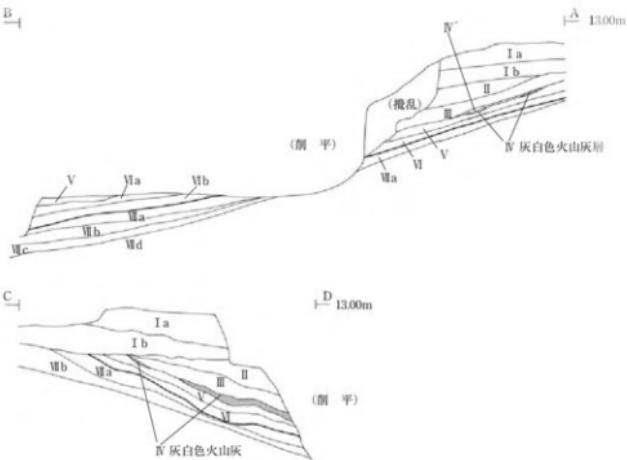
調査の方法

調査は日本測地系の国家座標X = -161350.00、Y=38500.00を任意の基準点（0・0）とし、国家座標上に3m×3mグリッドを設定して行った。基準点から東に3m、6m、・・・の基準線をE-3、E-6、・・・と呼称し、同様に西に3m、6m、・・・の基準線をW-3、W-6、・・・とした。南北についても同様に、基準点からS-3、S-6、・・・あるいはN-3、N-6、・・・と呼称した。検出した遺構については1/20平面図・断面図を作成した。一部、トータルステーションによって実測した箇所もある。

写真撮影は35mmと6×7のモノクロ・カラーリバーサルおよびデジタルカメラを用いた。



第2図 遺構配置図



番号	土色	土性	備考
I a	褐色 (10YR6/4)	シルト	崩れやすい。5mm以下の小礫をごく少量含む。しまりなし。粘性なし。
I b	にじみ青褐色 (10YR4/4)	シルト	1cm以下の小礫を少量含む。2cm以下の地山礫を少量含む。燒織1cm以下を少量含む。
II	黄褐色 (10YR6-5)	シルト	20cm以下の地山礫がほとんど。しまりあり(強)。粘性なし。炭酸性堆積物。
III	褐色 (10YR4/6)	シルト	炭化物を少量含む。1cm以下の地山礫を含む。5mm以下の燒織を少量含む。粗表土。
IV	黒色 (10YR2/1)	炭化物層	炭化物多く含む。しまりなし。粘性なし。散発的に分布。
V	灰白色 (10YR3/2)	火山灰層	粘性なし。灰白色火山灰層。
VI	褐色 (7.5YR4/4)	シルト	1cm以下の地山礫を多く含む。炭化物・燒織を含む。古代・礦文両方の遺物含む。
VIIa	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	2cm以下の地山礫を含む。炭化物・燒織を少量含む。礦文の遺物含む。
VIIb	にじみ褐色 (7.5YR5/4)	砂質シルト	20cmの石やや多く含む。3cm以下の地山礫を少量含む。以下、すべて無遺物層。
VIIc	にじみ褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	10cm以下の石をごく少量含む。裸 (7.5YR6/6) 色のブロックを少量含む。
VId	にじみ青褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	にじみ青褐色 (10YR4/3) のブロックがたらに入り込む。2cm以下の地山礫を含む。水の影響あり。

第3図 基本層序



番号	土色	土性	備考
1	黒色 (10YR2/1)	シルト	地山礫を含む。焼土・炭を含む。SX03包含層1層。
2	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	地山礫を含む。焼土・燒織を多く含む。SX03包含層2層。
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山礫を含む。焼土・燒織を若干含む。SX03包含層3層。
4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山礫を含む。遺物が若干あり。基本層序引解。
5	灰褐色 (10YR4/2)	砂礫	無遺物層。基本層序引解。

第4図 SX03遺物包含層・基本層序断面図

II 発見された遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構は、竪穴住居跡6軒、土器埋設遺構1基、墓壙1基、掘立柱建物跡11棟以上、柱跡1条等である。遺物は土師器、須恵器、赤焼土器、瓦、鉄製品、縄文土器、石器等で、整理用平箱20箱出土した。

ここでは、古代、縄文時代、中近世以降の順で記述する。

A. 古代の遺構と遺物

① 竪穴住居跡

【SI01竪穴住居跡】

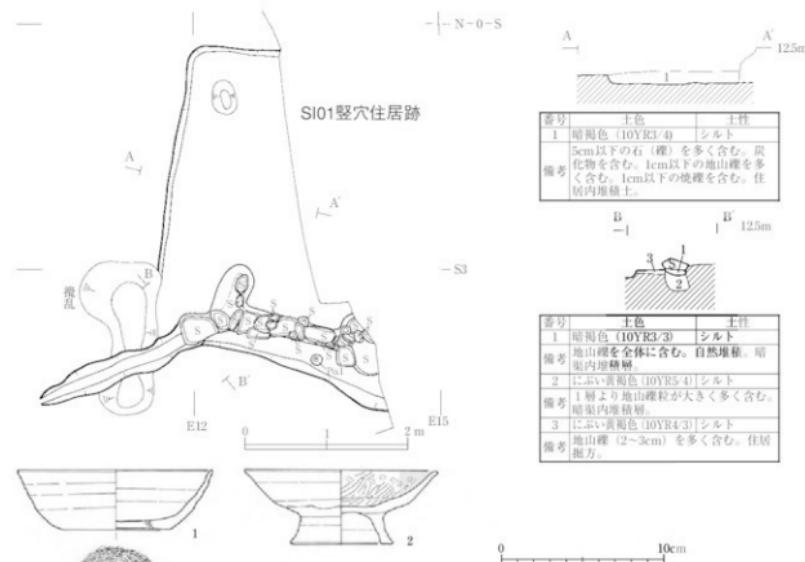
S-3・E-13付近の地山で検出され、住居跡の東半分は調査区外である。外延溝を持つ住居跡である。

【平面形・規模】 住居跡の東側は調査区外のため全体形は知れないが、隅丸方形ないしは隅丸長方形状を呈するものと推定される。大きさは西辺で3.64m、南辺で3m以上である。

【方向】 西辺でN-12° - Eである。

【堆積土】 暗褐色シルトが自然堆積している。

【壁】 ほぼ直立し、高さは西辺で約12cm残っている。



第5図 SI01竪穴住居跡・出土遺物

〔床面〕 ほぼ平坦である。斜面下部の南壁寄りの部分には、掘方が認められ、掘方埋土を床面としている。

〔主柱穴・カマド・周溝・貯蔵穴〕 検出されなかった。

〔外延溝～暗渠〕 住居南西隅から斜面下方にあたる西南西に外延溝が延びている。住居内では一部、二又に分かれ、主となる溝は南壁にほぼ平行して設けられ、扁平な礫を蓋石とした暗渠状の施設となっていた。溝内の堆積土は暗褐色シルトの自然堆積である。

〔出土遺物〕 ロクロ調整の土師器高台壺1点が伏せた状態で、南壁寄りの暗渠南側床面から出土した。器内面には火ハジケと見られる小剥落が全体を覆い、斑状に炭化物の付着する箇所も認められる。このほか、暗渠内堆積土から赤焼土器壺破片が出土している。

【S102堅穴住居跡】

N-7・W-5付近の地山で検出された。堆積層の状況から焼失住居と考えられた。

〔平面形・規模〕 東西4.2m、南北2.8mの隅丸長方形である。

〔方向〕 西辺でN-23°-Eである。

〔堆積土〕 堆積層は2層に分けられ、上層は褐色シルトの自然堆積層、下層は焼土・焼礫・炭化物を非常に多く含む暗赤褐色シルト層である。さらに全体を古代・縄文時代の遺物が混じるV層が覆っている。

〔壁〕 ほぼ直立し、高さは西辺で約10cm残っている。

〔床面〕 ほぼ平坦である。掘方埋土を床面としている。

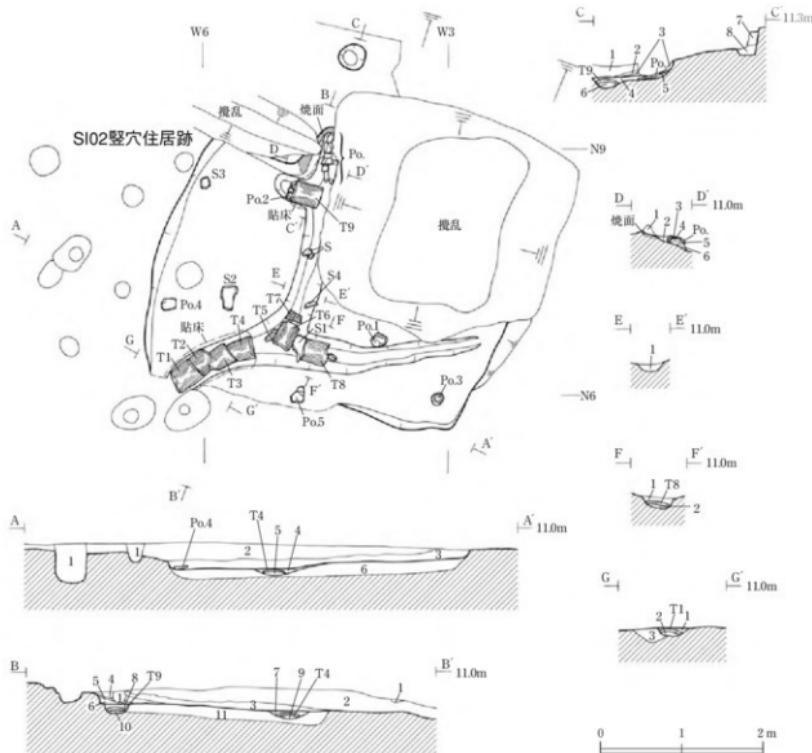
〔主柱穴〕 検出されなかった。

〔カマド〕 北辺西寄りに設けられている。全体的に搅乱が著しく、残存状況は良好ではない。煙出ピット、カマド本体の西側部分、暗渠施設が残存している。カマド本体は北辺から58cmほど突出するよう作られている。奥壁～左側壁の内面に顕著な焼面が認められた。東側壁は搅乱で完全に破壊されていた。

カマド奥壁から74cmのところで、煙出ピットが検出された。煙出ピットは32～28cmの楕円形を呈し、深さ36cmである。堆積土は自然堆積の褐色・暗褐色土で炭化物・焼礫を含んでいる。

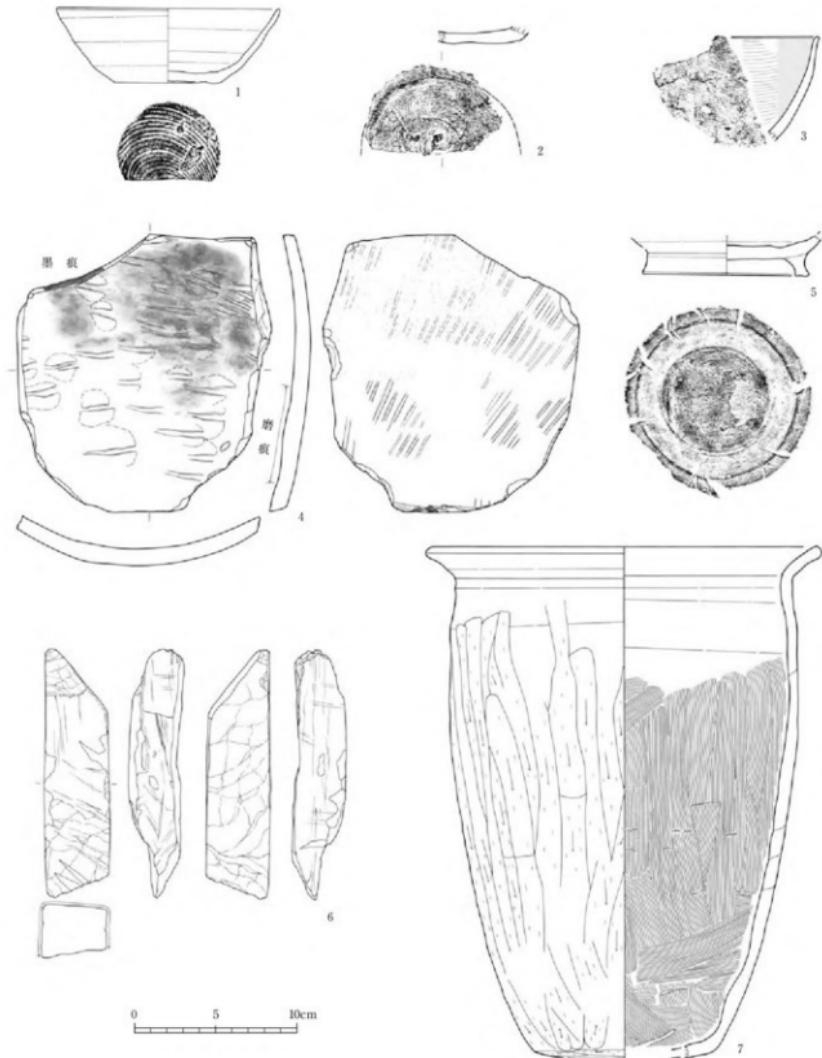
〔暗渠施設〕 カマドから延びる暗渠施設と住居東側から延びる暗渠施設とが合流し、住居南西隅寄りの方向に延びていく。暗渠の出口部分には、貼床と貼床下の蓋石状に並べた平瓦T1～4が検出された。暗渠の合流部分は粘板岩の平石と平瓦が蓋石状に配されていた。この部分では貼床は認められず、焼失の際の火を直接受けた平瓦が検出された。暗渠内の堆積土は焼土・炭化物を多量に含む暗褐色シルトの自然堆積で、蓋状の施設の検出されない部分においても同様の堆積状況であった。こうした部分では火を受けた礫が斜めに落ち込んでいる様子が観察され、暗渠が開口していたか、木質の蓋が焼失した可能性が考えられた。

カマドから延びる暗渠施設は、土師器壺大破片をドーム状に並べた燃焼部底面、及び平瓦を用いた焚口部分で認められ、その上にはともに黄褐色粘土が貼られていた。暗渠内堆積土は焼土・炭化物を多く含む暗赤褐色シルトの自然堆積土である。



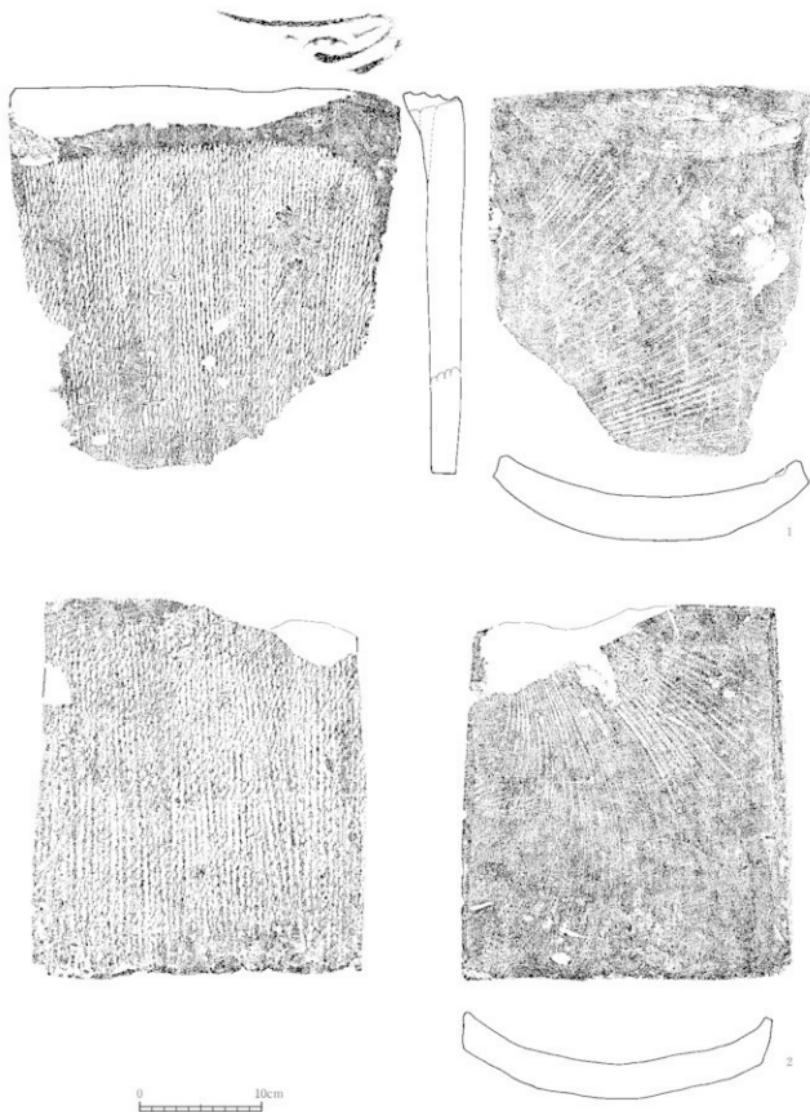
番号	土色	土性	備考
1	にふい黄褐色 (10YR5-4)	シルト	燒繩 (5mm以下) を少量含む。しまりあり。柱穴埋土。
2	褐色 (7.5YR4-4)	砂質シルト	砂岩岩粉 - 地山(小礫1cm以下)を多量に含む。燒繩・炭化物を若干含む。基本層V層。
3	褐色 (10YR4-4)	砂質シルト	砂岩岩粉 - 焼繩を含む。下部に多量の燒繩・燒繩・炭化物を含む。住居内堆積土。
4	褐色 (7.5YR4-3)	シルト	砂岩岩粉を多量に含む。燒繩岩粉を若干含む。下部に燒土多く含む。カマド崩壊土。
5	黒色 (7.5YR2-1)	炭化物	炭化物層。カマド内堆積層。
6	にふい黄褐色 (10YR4-4)	シルト	燒繩や焼物を多く含む。カマド内堆積土。
7	にふい黄褐色 (10YR5-4)	粘質シルト	黄褐色粘質シルトブロック(地山)を多く含む。凝灰岩粉 (5mm以下) もやや多い。粘床。
8	にふい黄褐色 (10YR5-4)	粘質シルト	黄褐色粘質シルトブロック(地山)を多く含む。凝灰岩粉 (5mm以下) もやや多い。粘床。
9	暗赤褐色 (2.5YR3-4)	シルト	土粒 (5mm以下) ・炭化物層 (3mm以下) を多く含む。しまりなし。暗渠内自然堆積。
10	暗赤褐色 (2.5YR3-4)	シルト	土粒 (5mm以下) ・炭化物層 (3mm以下) を多く含む。しまりなし。暗渠内自然堆積。
11	褐色 (10YR4-6)	シルト	燒繩を多量に含む。住居掘削。
12	褐色 (7.5YR4-3)	シルト	地山焼繩が多く含む。燒繩・燒繩をやや多く含む。下部に燒土あり。カマド内堆積土。
2	黒色 (7.5YR2-1)	炭化物	地山焼土あり。カマド内堆積土。
3	にふい黄褐色 (5YR4-4)	シルト	地山角礫層。炭化物を含む。燒土を多く含む。しまりあり。粘性なし。カマド内堆積土。
4	赤褐色 (5YR4-3)	砂質シルト	燒土を多く含む。しまりなし。粘性なし。カマド内堆積土。
5	褐色 (7.5YR4-3)	シルト	地山小礫・燒繩・炭化物を含む。粘性なし。暗渠内堆積土。自然堆積。
6	暗赤褐色 (10YR3-3)	シルト	地山砂・燒土・燒繩を含む。焼出ビット。自然堆積。
7	褐色 (7.5YR4-3)	シルト	地山砂・燒土・燒繩を含む。焼出ビット。自然堆積。
8	暗赤褐色 (10YR3-3)	シルト	地山砂・燒土・燒繩を含む。焼出ビット。自然堆積。
1	暗赤褐色 (10YR3-3)	シルト	燒土・燒繩を含む。カマド内堆積土。底面は燒面。
2	にふい黄褐色 (10YR5-4)	粘質シルト	崩落を埋め戻した粘床。
3	褐色 (10YR4-4)	シルト	やわらかいい上細要素の崩落直下土。自然堆積。
4	暗赤褐色 (10YR3-3)	シルト	本筋土・燒土を含む。暗渠内堆積土。自然堆積。
5	暗赤褐色 (5YR2-2)	シルト	本筋土を多く含む。暗渠内堆積土。自然堆積。
6	にふい黄褐色 (10YR5-4)	粘質シルト	小礫含む。暗渠充填物の底層。
1	暗赤褐色 (2.5YR3-4)	シルト	燒土・燒繩を多く含む。自然堆積。
2	暗赤褐色 (10YR3-3)	シルト	木炭層・燒土を含む。暗渠内堆積土。
3	褐色 (10YR4-6)	シルト	燒土・燒繩を多く含む。底層。

第6図 SI02豎穴住居跡



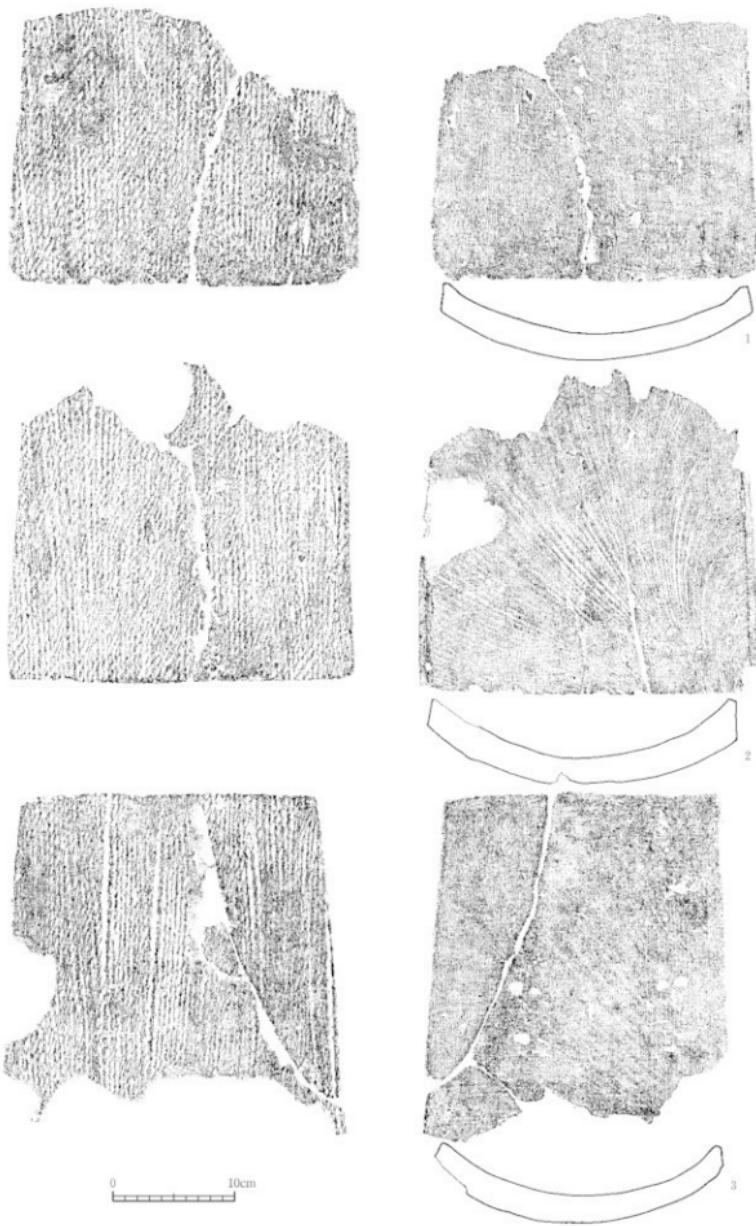
第7図 SI02竪穴住居跡出土遺物(1)

No.	種類	出土遺物・部位	特徴	長径	短径	器高	等真同様
1	鉢形器・环	SI02・堆积土	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。底面：回転あわせ無調整。残1.3.	(13.8)	(6.4)	4.7	6-3
2	鉢形器・环	SI02・堆积土	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。底面：回転あわせ無調整。残1.4.	-	(10.0)	-	6-4
3	手制器・环	SI02・底面	外面：ロクロナデ。内面：ハラミヘタ→黒色処理（一部被熱による色メタ）。	-	-	-	6-6
4	手制器・环	SI02・底面po.3	鉢形器（外面：手制タキ→ハラケズリ（下部）。内面：アカ貝痕・ナデ）底片からの軸	長18.0	幅15.7	厚0.9	6-5
5	手制器・環	SI02・底面po.3	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ（細い）。底面：回転あわせ無調整。外側にスレ痕。被熱。	-	10.3	-	6-7
6	手制器・環	SI02・底面po.3	被熱による赤茶色調。写真同様6-8と同一個体か。	-	-	-	6-8
7	手制器・環	SI02・底面po.5	被熱による赤茶色調。写真同様6-8と同一個体か。	-	-	-	6-9
8	石器	SI02・底面 S4	細刃。砂岩。	長15.4	幅14.0	厚3.3	6-10
9	手制器・環	SI02・セマド隣接	外面：ロクロナデ→ハラケズリ。内面：ロクロナデ→ハラナデ・ナデ。底面：ハラケズリ。	(24.6)	(11.2)	31.8	7-1
10	手制器・環	SI02・セマド隣接	外面：ロクロナデ→ハラケズリ。内面：ロクロナデ・ナデ（細）。摩滅。	-	-	-	7-2
11	手制器・環	SI02・セマド隣接	外面：ロクロナデ→ハラケズリ。内面：ロクロナデ→ハラケズリ。底面：ロクロナデ→ナデ（細）。	-	-	-	7-3



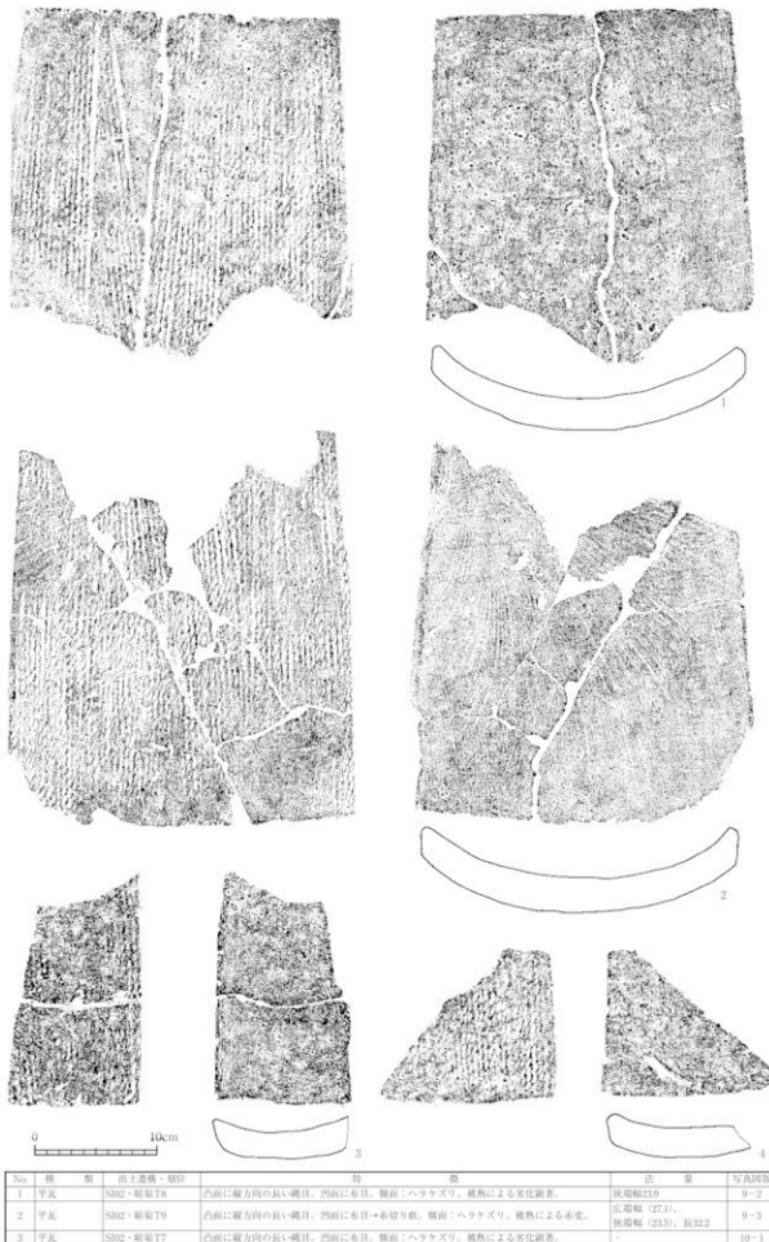
第8図 SI02堅穴住居跡出土遺物（2）

No.	種類	出土遺構・層位	特徴	法量	写真回数
1	軒平丸	SI02・堅塗T4	瓦による勾型縞文。西面に縦方向の長い縹目。西面に布目・糸切り痕。側面：ヘラケズリ。	広幅軒29.0、狭幅軒30.9	7-5
2	平丸	SI02・堅塗T1	西面に縦方向の長い縹目。西面に布目・糸切り痕。側面：ヘラケズリ。	広幅軒26.1、狭幅軒23.5、H.309	8-1



第9図 SI02竪穴住居跡出土遺物（3）

No.	種類	出土遺物・部位	特徴	法量	写真回数
1	平瓦	SI02・施渠T2	片面に縦方向の長い溝目。凹面に布目・赤切引瓦。裏面：ヘラケズリ。	広場幅(26.6)	8-2
2	平瓦	SI02・施渠T3	片面に縦方向の長い溝目。凹面に布目・赤切引瓦。裏面：ヘラケズリ。	広場幅25.4	8-3
3	平瓦	SI02・施渠T6	片面に縦方向の長い溝目。凹面に布目・赤切引瓦。裏面：ヘラケズリ。被熱による変化調査。井戸周辺27.8		9-1



第10図 SI02竪穴住居跡出土遺物（4）

No.	種類	出土遺物・細目	特徴	法量	写真図版
1	平丸	SB02・薪柴T8	凸面に縱方向の長い縦目。凹面に布目。側面：ハラケズリ。被熱による劣化新素。	扶助輪23.0	9-2
2	平丸	SB02・薪柴T9	凸面に縱方向の長い縦目。凹面に布目・糸切り痕。側面：ハラケズリ。被熱による赤変。	広辯輪(27.1), 扶助輪(23.5), 長辯輪	9-3
3	平丸	SB02・薪柴T7	凸面に縱方向の長い縦目。凹面に布目。側面：ハラケズリ。被熱による劣化新素。	-	10-1
4	平丸	SB02・薪柴T5	凸面に縱方向の長い縦目。凹面に布目。側面：ハラケズリ。被熱による劣化新素。	-	10-2
平ね	SB02・薪柴S1	楕板刃を複数振り、曲打により整形。被熱による赤変。	長308, 幅189	10-3	
平ね	SB02・薪柴S2	楕板刃を複数振り、曲打により整形。	長315, 幅148	10-4	

〔周溝・貯蔵穴〕 検出されなかった。

〔出土遺物〕 住居堆積土から須恵器坏片、カマド焚口部暗渠に自然流入する土師器片、床面から須恵器破片、砥石が出土している。暗渠施設に使用された土師器甕・軒平瓦・平瓦・粘板岩平石がある。

堆積土出土の須恵器坏の底部は回転糸切りで調整が施されていないものと回転ヘラ切りのものがある。床面出土の土師器坏片はやや大振りのもので、体部下半に手持ちヘラ削りが施されている。転用硯は須恵器大甕体部破片を用いている。縁辺には製作の際の敲打痕や擦痕が残されている。須恵器甕は回転ヘラ切りの後に高台が付されている。砥石は暗渠に落ち込む形で発見された。暗渠の蓋石に使用されたと見られる粘板岩平石1点は暗渠に落ち込む形で、もう1点は床面から発見された。ともに粘板岩を薄く割り敲打によって整形されている。暗渠に据えられた土師器甕はロクロ調整の後に、外側下部にケズリ、内面にヘラナデを加えている。軒平瓦・平瓦は凸面に長軸方向に禪叩き目、凹面に細かい布目が見られる。瓦頭文様は笹による均整唐草文である。

【SI08豎穴住居跡】

N-9・W-23付近の地山で確認された。SI08豎穴住居跡より新しく、SK20より古い。中近世以降の柱穴や現建物の基礎や埋設管によって壊されている。住居跡の南側は大きく削平され、北西部とカマド部分を残すのみである。

〔平面形・規模〕 北西コーナー部分で東西3.0m以上×南北2.0m以上の規模である。

〔方向〕 西辺の推定ラインでN-39°-Eである。

〔堆積土〕 自然堆積である。8層に細分される。

〔壁〕 ほぼ直立し、高さはカマド付近で約15cmほどである。

〔床面〕 床面はほぼ平坦である。住居掘方理土を床にする。

〔主柱穴〕 検出されなかった。

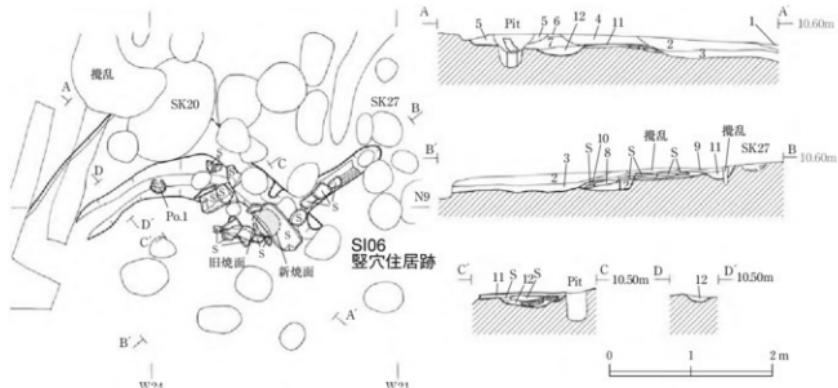
〔カマド〕 カマドは北辺側で検出された。カマド本体はすでに崩落しており、焼面と煙道・煙出ピットが検出された。焼面は約40×30cmの大きさで粘土による貼床面上に硬化面が認められた。煙道底面から焼面貼床下には、連続して粘板岩の平石が並べられ、暗渠の排水施設が作られている。特に焼面貼床下には、約30×60cmの大きな平石が検出された。この平石下で煙道からの暗渠とT字状に交わる暗渠が検出された。幅30~40cm、深さ10~12cmで、残存状況の良い箇所では、粘板岩の蓋石と貼床が認められた。暗渠内堆積土は炭化物・焼土混じりの自然堆積である。

こうした暗渠施設に壊される形で約15×30cmの古い焼面の残痕が検出され、カマドの作り換えが行われていることが確認された。

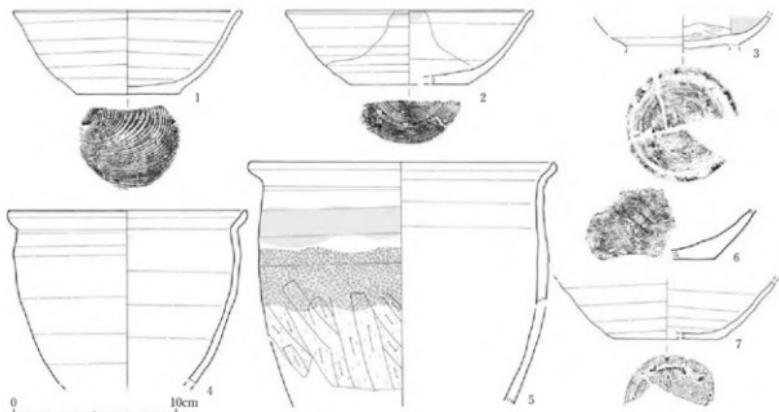
煙出ピットは長軸40cm×短軸22cmの楕円形で深さ16cmである。堆積土は自然堆積で、下層の堆積土は暗渠蓋石下の堆積層と連続している。

〔周溝・貯蔵穴〕 検出されなかった。

〔出土遺物〕 暗渠内堆積土から、赤焼土器坏1点、須恵器坏1点、土師器高台坏1点が出土している。いずれも破片資料である。赤焼土器坏・須恵器坏の底部は回転糸切りで調整が施されていない。カマド内堆積土及び暗渠堆積土上面から土師器甕が出土している。ともに成形にはロクロが用いられていない。

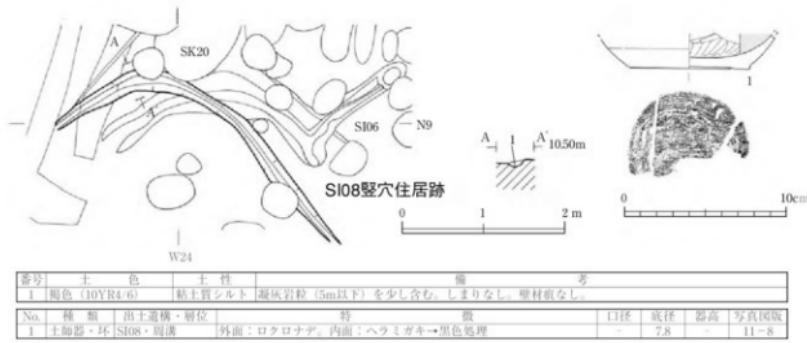


番号	土色	土性	備考
1	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山裡、炭化物を含む。
2	にぶい褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	凝灰岩粒・地山小礫1cm以下を多量に含む。地塊3mmもやや多く含む。炭化物3mm以下を若干含む。
3	灰褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	下層をブロック状に若干含む。凝灰岩粒・小礫、地塊を含む。しまり良。
4	褐色 (10YR4/4)	シルト	凝灰岩粒 (5mm以下) を多量に含む。地塊内堆積土。
5	にぶい褐色 (10YR4/3)	シルト	凝灰岩粒 (5mm以下) をやや多く含む。炭化物3mm以下を若干含む。住居内堆積土。
6	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	凝灰岩粒・地山小礫1cm以下をやや多く含む。炭化物3mm以下を若干含む。住居内堆積土。
7	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	凝灰岩粒 (5mm以下) を若干含む。地塊・砂子ブロック・炭化物 (5mm以下) を多量に含む。しまりやや不良。
8	褐色 (10YR4/4)	シルト	地土粒 (5mm以下) をやや多く含む。炭化物 (3mm以下) を若干含む。凝灰岩粒 (5mm以下) をやや多く含む。
9	にぶい褐色 (10YR3/4)	シルト	黄褐色粘質シルトブロック (地山土) をやや多く含む。炭化物粒・燒土粒を若干含む。
10	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	地土粒を多量に含む。炭化物粒 (5mm以下) を若干含む。凝灰岩粒 (5mm以下) を比較的多く含む。カマド内堆積土。
11	にぶい褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロック・凝灰岩粒含む。粘土。
12	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	炭化物塊 (3mm以下) ・地土粒 (3mm以下) を多量に含む。しまり不良。暗基内堆積土。自然堆積。



No.	種類	出土遺構・刷位	特徴	口径	底径	器高	写真図版
1	赤褐色土器・环	SI06・塗装	外面：ロクロナデ。炭化物付着。内面：ロクロナデ。	(14.2)	6.4	5.2	II-1
2	暗褐色土器・环	SI06・塗装	外面：ロクロナデ。口縁部・変化物付着 (火炎跡)。裏面：回転条拂り痕調節。被熱による赤化。	(15.4)	(7.2)	4.6	II-2
3	土器部・高台	SI06・塗装	外面：ロクロナデ。内面：ハリタガキ・黑色斑駁。裏面：回転条拂り痕・付合面 (ロクロナデ)。	-	7.1	-	II-3
4	土器部・甕	SI06・カマド内堆積土	外面：ロクロナデ (ロクロノ糊)。内面：ロクロナデ。残1/8。	(14.8)	-	-	II-4
5	土器部・甕	SI06・塗装po.1	外面：ロクロナデ・ヘラケズリ (下部)。胴上部：模様炭化物付着。	19.7	-	-	II-5
6	土器部・甕	SI06・塗装po.1	外側：ヘラケズリ・平行行タキ。内面：ユビナデ。底面：ヘラケズリ。	-	-	-	II-6
7	暗褐色土器・环	SI06・塗装	外面：ロクロナデ。底面：回転条拂り痕調節。	(6.2)	-	-	II-7

第11図 SI06堅穴住居跡・出土遺物



第12図 SI08堅穴住居跡・出土遺物

る。掘方からは須恵器環片が出土している。底部は回転糸切りで調整が施されていない。

【SI08堅穴住居跡】

N-9・W-24付近の地山で確認された。SI06堅穴住居跡より古い。中近世以降の柱穴や現建物によって全体が大きく削平され、周溝を残すのみである。

【平面形・規模】東西3.0m以上×南北2.0m以上である。

【方向】西辺でN-62°-Eである。

【堆積土・壁・床面・カマド】残存しない。

【主柱穴】検出されなかった。

【周溝】一部残存している。幅20~25cm、深さ5~10cmで、周溝内堆積土は褐色粘土質シルトである。

【貯蔵穴】検出されなかった。

【出土遺物】周溝内埋土から、土師器環片が出土している。土師器環底面は回転糸切りで調整が施されていない。

【SI09堅穴住居跡】

N-0-S、W-31付近の地山で検出された。SI10堅穴住居跡より新しい。全体に擾乱孔や溝、柱穴等によって大きく削平され、北東コーナー付近の一部が残存しているのみである。

【平面形・規模】南北1m以上×東西1.8m以上である。

【方向】東辺でN-24°-Wである。

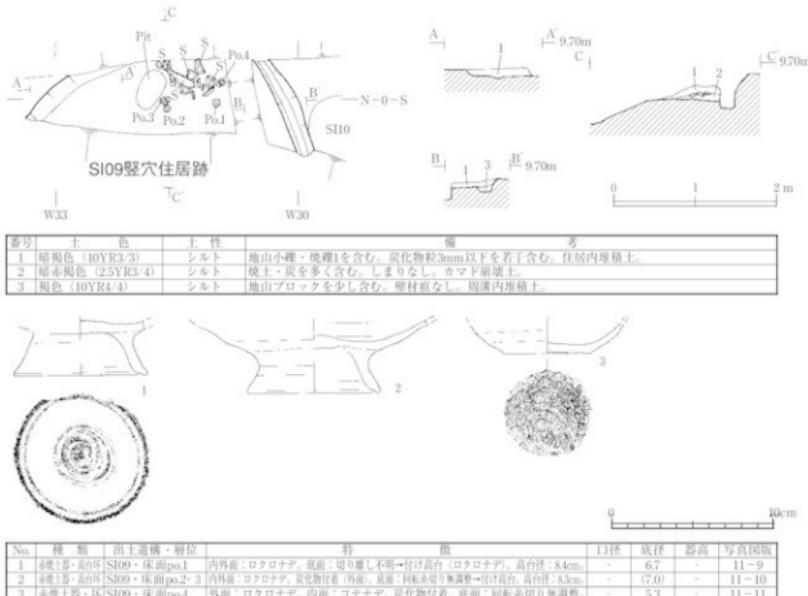
【堆積土】暗褐色シルトが自然堆積している。

【壁】ほぼ直立し、高さは北側で約8cmほどである。

【床面】ほぼ平坦である。地山を床面としている。

【カマド】検出されなかった。ただし、北東部で焼土・炭化物混じりの焼礫を含む褐色土層が確認され、カマド崩壊土と推測された。

【周溝】東側にのみ認められた。幅13~16cm、深さ約10cmである。褐色シルトの自然堆積である。



第13図 SI09堅穴住居跡・出土遺物

【主柱穴・貯蔵穴】検出されなかった。

【出土遺物】床面から赤焼土器高台壺2点・壺1点が出土している。壺底部は回転糸切りで調整が施されていない。

【SI10堅穴住居跡】

N-0-S、W-28付近の地山で検出された。SI09・SK13・SD11よりも古い。南側は擾乱孔や削平を受けしており、概して残存状況は良くない。また、東側も削平されており、掘方と貯蔵穴のみが残存する。

【平面形・規模】東西約2.0m以上×南北約1.9m以上の隅丸方形である。

【方向】西辺でN-15°-Eである。

【堆積土】オリーブ褐色・暗褐色シルトが自然堆積している。

【壁】ほぼ直立し、高さは北側で約8cmほどである。

【床面】ほぼ平坦である。掘方を床面としている。

【カマド】北側のはば中央約15×20cmほどの焼面が検出された。カマド本体は崩落し残っていない。カマド奥壁～煙道の想定される箇所にはSK13があり、残っていない。

【主柱穴・周溝】検出されなかった。

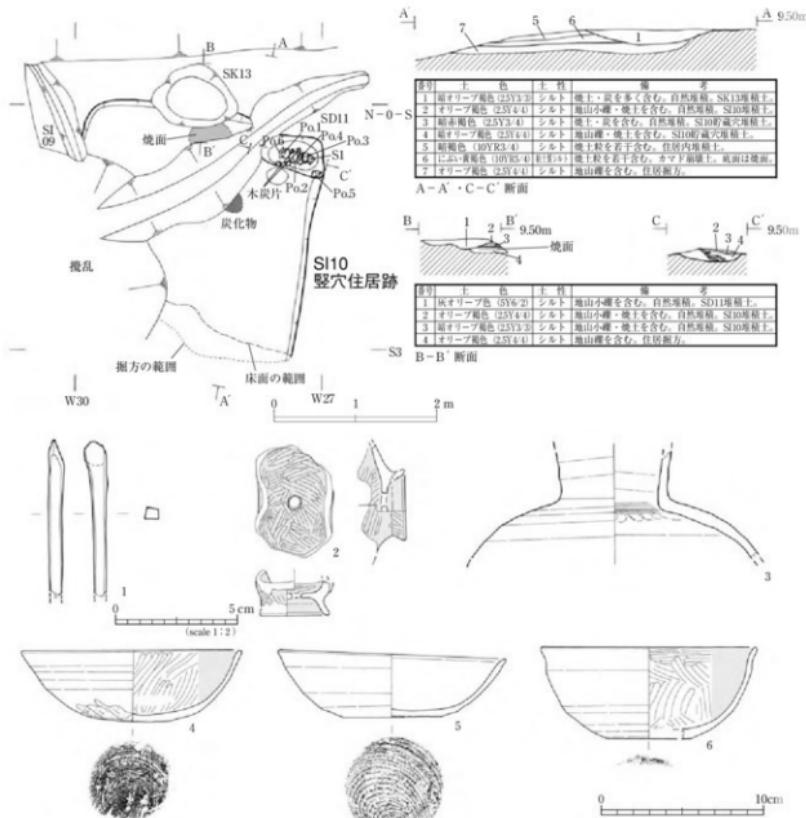
【貯蔵穴】北東コーナーで検出された。壺類を中心に重なり合って発見された。

【掘方】深さ10~14cmの掘方が認められた。掘方埋土は地山礫を多く含むオリーブ褐色シルトである。

【出土遺物】造構確認時に鉄錐1点、堆積土から底部穿孔の施された両黒の耳皿1点、貯蔵穴から須恵器壺1点、土師器壺2点、赤焼土器壺1点が出土した。土師器壺・赤焼土器壺の底部はともに回転系切りで調整が施されていない。

② その他の遺構

その他の遺構として、焼面や土壤、溝跡等がある。これらのうちには、本来、住居の貯蔵穴や暗渠～外延溝、周溝の可能性がある遺構も認められるが、全般に擾乱・削平が著しく、明確に「住居跡」



No.	種類	出土遺構・剖位	特徴	口径	底径	器高	写真図版
1	鉄錐	SI10・造構確認	断面四角形状・先端部・両刃状をなし	-	-	長6.7	11-12
2	土器	SI10・堆積土	内面：ヘラミガキ・褐色泥、裏面、穿孔、底面：切り離し不規・付高台→黑色処理	-	-	-	11-13
3	須恵器・壺	SI10・貯藏穴 po.5	外面：ロクロナデ、内面：ヘラミガキ→黒色サエ→ナデ	-	-	-	-
4	土器	SI10・貯藏穴 po.1-6	外面：ロクロナデ、内面：ヘラミガキ→黑色処理。底面：回転系切り	13.7	4.8	4.5	11-15
5	赤燒土器・壺	SI10・貯藏穴 po.1	外面：ロクロナデ、内面：コテナデ、底面：回転系切り無調整	14.1	6.0	4.0	11-16
6	土器	SI10・貯藏穴 po.4	外面：ロクロナデ、内面：ヘラミガキ→黑色処理。底面：回転系切り無調整	(13.4)	6.5	5.7	11-17
7	磨石	SI10・貯藏穴 SI	外面：崩損、擦痕	長89	幅7.5	高6.2	11-18

第14図 SI10堅穴住居跡・出土遺物

と認定するには至らなかった。ここでは、地点ごとにまとめて概要を述べ、最後に単独の土壙について記述する。

a. 【SX05貼床・SX17・SD18溝跡】

N-6・W-15付近の地山で検出された。全体に大きく削平され、中近世以降の柱穴や攪乱が多く見られる箇所である。SX05貼床上面で、約30cmと約10cm程の不整形の焼面が検出された。さらに全体を掘り下げるに、SD18溝跡が検出された。SX05がカマドの残痕でSD18溝跡が暗渠、あるいは全く別の住居の外延溝の可能性も考えられたが、詳細は不明である。SX05掘方の掘り下げ中にSX17を検出している。平石の下には、焼土・炭化物を多く含む堆積土が認められた。SX05掘方中に高台壠破片1点が出土している。

b. 【SK27土壙・SD21溝跡・SD22溝跡】

SK27はN-10・W-21、SD21・SD22はN-11・W-18付近の地山で検出された。中近世以降の建物跡によって大きく削平されている箇所である。SD22溝跡を切る形でSD21溝跡が検出された。SK27土壙底面からは、縛・土師器破片が出土している。

c. 【SX14貼床・SD15溝跡】

N-5・W-19付近の地山で検出された。全体に大きく削平されている箇所である。SX14貼床上面に約20cm程の焼面が認められ、全体を掘り下げるにSD15溝跡が確認された。出土遺物はない。

d. 【SK13土壙・SD11溝跡】

N-0-S-W-29付近の地山で検出された。現水路の南側部分にあたる。SI10竪穴住居跡を壊すSK13土壙とSD11溝跡が検出された。SK13土壙の堆積土には焼土・炭化物が多く含まれていた。堆積土から内黒土師器壺2点が出土している。SD11溝跡の堆積土は自然堆積である。出土遺物はない。

e. 【SK12土壙】

N-8・W-14付近の地山で検出された。長軸約90cm、短軸約50cm、深さ18cmの土壙である。焼土・炭化物混じりの暗褐色・にぶい黄褐色シルトが自然堆積している。出土遺物はない。

f. 【SK20土壙】

N-10・W-24付近の地山で検出された。SI06竪穴住居跡よりも新しい。長軸130cm、短軸90cm、深さ約5cmである。堆積土は褐色シルトが自然堆積している。底面から、土師器高台壺2点、土師器壺1点、土師器鉢1点、赤焼土器壺1点、須恵器壺1点が出土している。

g. 【SK25土壙】

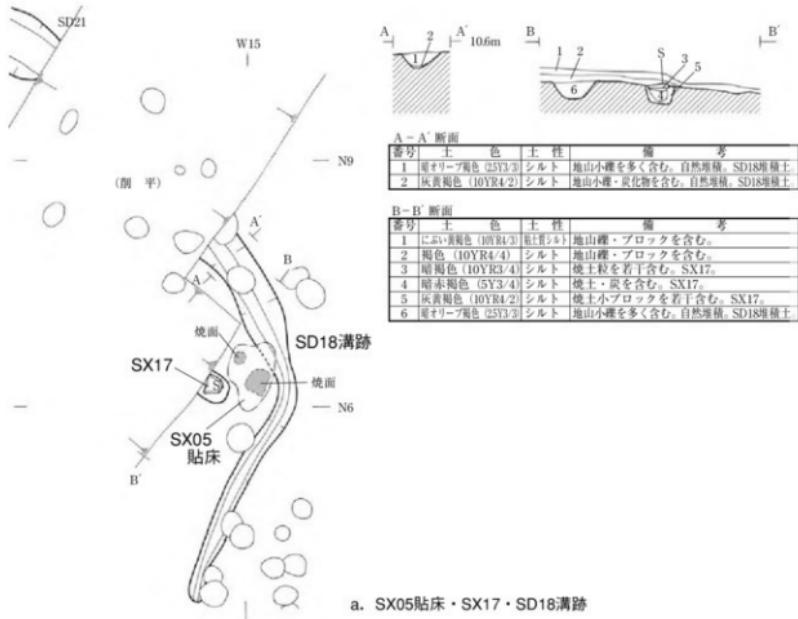
N-6・W-19付近の地山で検出された。北側は削平されている。径110cm程のほぼ円形をなす土壙である。堆積土は炭化物を少量含む暗オリーブ粘土の自然堆積である。出土遺物はない。

h. 【SK26土壙】

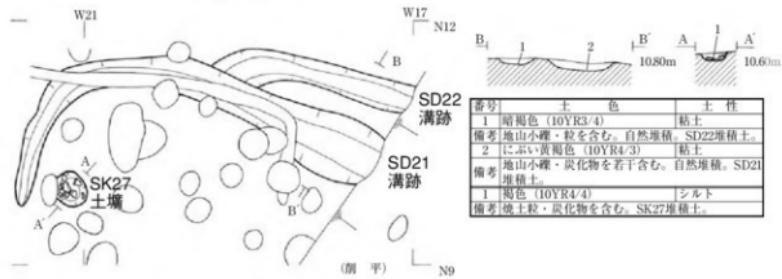
S-2・W-18付近の地山で検出された。径65cm程の円形をなす土壙である。堆積土は暗褐色・灰黄褐色粘土質シルトの自然堆積である。出土遺物はない。

③ 遺構外の出土遺物

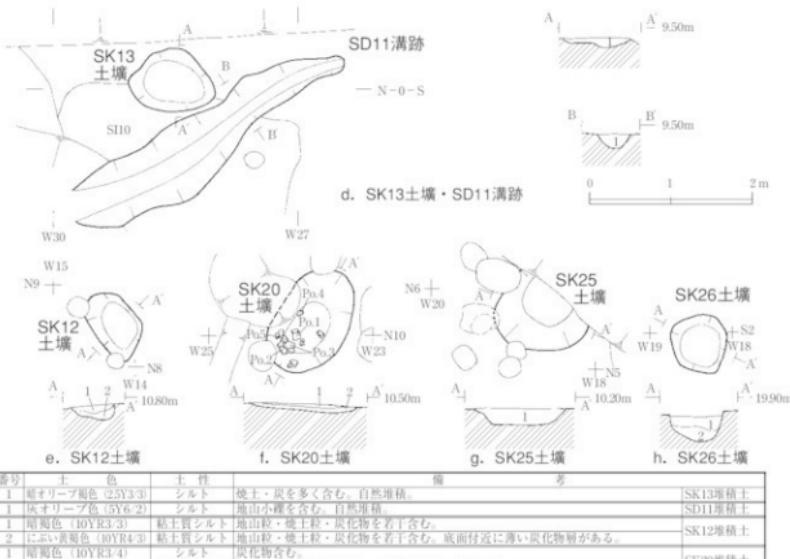
V層を中心に、若干の古代の遺物が縄文土器片等とともに出土した。いずれも層中の遺物で出土状



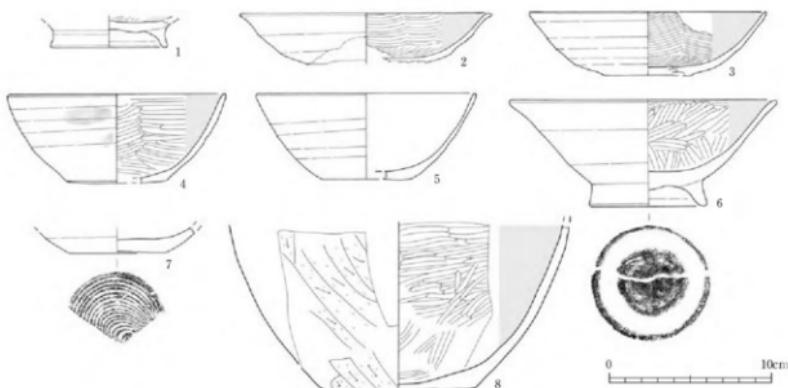
a. SX05貼床・SX17・SD18溝跡



第15図 その他の遺構 (1)

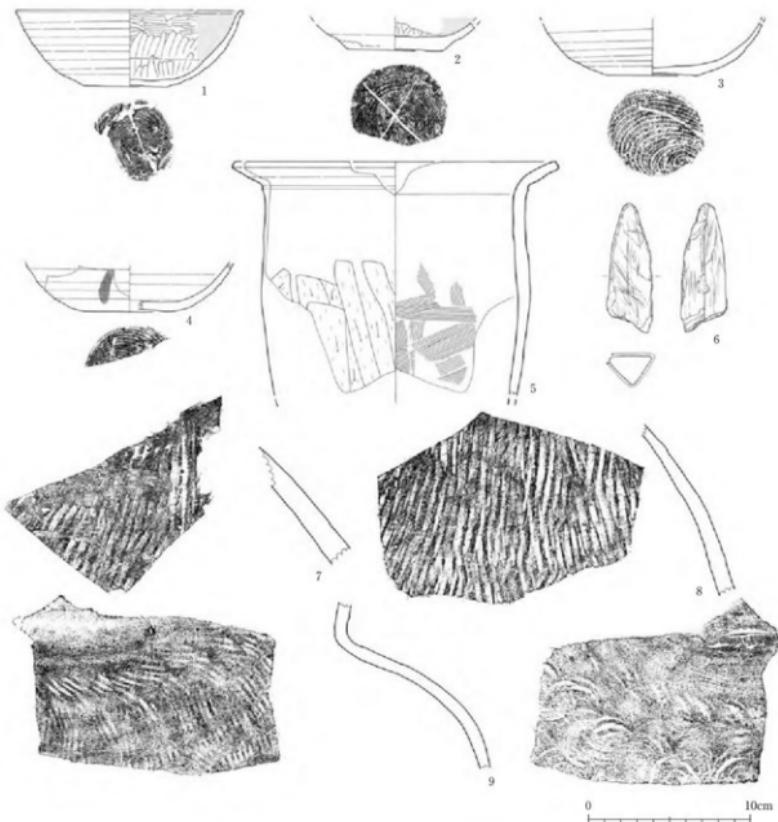


第16図 その他の遺構 (2)



No.	種類	出土遺構・割位	特徴	口径	底径	高さ	写真回数
1	土器部・灰苔付	SK05・側面	外面: ロクロナ。内部: ヘラミガキ→黒色処理。底面: 切り離し不明→付け台付。壁成層有。	(15.6)	-	-	12-1
2	土器部・灰苔付	SK13・堆積土	外面: ロクロナ。内部: ヘラミガキ→黒色処理。台付有。	(15.6)	-	-	12-2
3	土器部・灰苔付	SK20・堆積土	前面: ロクロナ。内部: ヘラミガキ→黒色処理。火候: 煙色有。	(14.8)	-	-	12-3
4	土器部・灰苔付	SK20・底面	前面: ロクロナ。内部: ヘラミガキ→黒色処理。底面: 切り離し不明→付け台付。壁成層有。	13.7	4.8	4.5	12-4
5	赤褐色土器・灰苔付	SK20・底面po.2	前面: ロクロナ。内部: ヘラミガキ→黒色処理。底面: 壁成層切り無調節。船子鉢質。やや火候有。	(13.6)	(5.5)	5.3	12-5
6	土器部・灰苔付	SK20・底面po.1	前面: ロクロナ。内部: ヘラミガキ→黒色処理。底面: 切り離し不明→付け台付。	16.6	7.3	6.6	12-6
7	須恵器・裏?	SK20・底面po.4	前面: ロクロナ。内部: ロクロナ。表面: 陶器質。底面: 壁成層切り無調節。灰。底: 1.8(1.7)。	-	(6.0)	-	12-7
8	土器部・裏?	SK20・底面po.3・基	前面: ヘケズリ。内部: ヘラミガキ→黒色処理。底面: 切り離し不明→ヘラケズリ。	-	(9.2)	-	12-8

第17図 その他の遺構出土遺物



No.	種類	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	写真版
1	土師器・环	遺構外、灰白下	外面：ロクロナデ（ロクロ目剥者）。内面：ヘラミガキ→黑色毛理。底面：同軸系切り無溝型。	14.1	5.2	4.7	E2-9
2	土師器・环	遺構外	外面：ロクロナデ。内面：ヘラミガキ→黑色毛理。底面：同軸系切り無溝型→ヘラミガキ（×）。1片。	-	6.1	-	12-10
3	赤燒土器・环	遺構外、灰白下	外面：ロクロナデ。内面：コタナデ。底面：同軸系切り無溝型。被熱による赤變。	-	6.0	-	12-11
4	須恵器・环	遺構外	外面：ロクロナデ。黒青（×）。内面：ロクロナデ。底面：同軸系切り無溝型。1片。	-	(5.6)	-	12-12
5	土師器・丸	遺構外	外面：ロクロナデ→ヘラケナデ（下部）。内面：ロクロナデ→ヘラナデ（上部）→ナデ（根）。	-	-	-	12-13
6	砾石	遺構外	断面：二角形。壓痕・拖痕。下部：自然面。碎石。	長80、幅33、高19	-	-	12-16
7	須恵器・丸	遺構外、灰白下	外面：平行タタキ→タタキ（下部）。ロクロナデ。内面：アテ具痕→ナデ。	-	-	-	12-14
8	須恵器・丸	遺構外	外面：平行タタキ→ロクロナデ（頭部）。内面：アテ具痕→ロクロナデ。	-	-	-	12-15

第18図 遺構外の出土遺物

態は良好ではない。図化できるものは第18図のとおりである。

B. 繩文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構には、土器埋設遺構1基がある。このほか、調査区北側のVI層上面の窪地に形成されたSX03遺物包含層がある。また、VI層・V層からも縄文時代の遺物が出土している。

① 土器埋設遺構

【SX23土器埋設遺構】

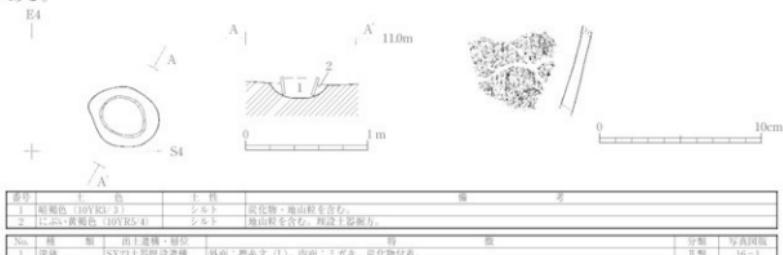
〔重複・残存状況〕 遺構上部は削平されている。

〔平面形・規模〕 長軸30cm×短軸25cmの楕円形を呈し、深さ10cmである。

〔堆積土〕 土器の据方部分はにぶい黄褐色シルト、土器内には炭化物・地山粒を含む暗褐色シルトが堆積していた。特に骨片・骨粉は検出されなかった。

〔壁〕 砂礫に富む地山を掘り込んで壁としている。

〔土器〕 底部を欠いた深鉢形土器の胴下部を正立して、埋設している。確認時の上面径で20cmである。土器は摩滅が著しく復元できなかったため、一部を図示する。縦走撚糸文（L）が施されており、胎土に纖維は含まれていない。内面には炭化物が付着しており、実際に煮沸に用いられた土器の転用である。



第19図 SX23土器埋設遺構・出土土器

② 遺物包含層

【SX03遺物包含層】

〔重複・残存状況〕 南側は大きく削平されている。中近世以降の柱穴に一部壊されている。

〔平面形・規模〕 東西2.2m×南北4.0mの窪地に形成されている。

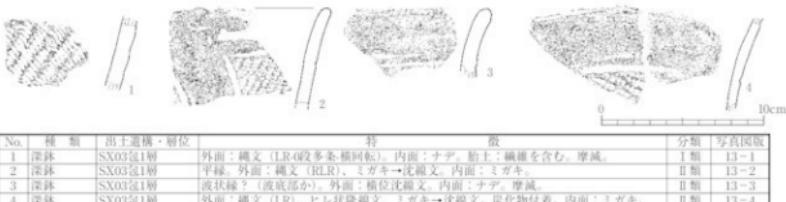
〔堆積層〕 VI層上面に形成（第4図参照）されている。包含層1層は最大厚4cmで焼土・炭化物を含む黒色シルト、包含層2層は最大厚10cmで焼土・焼礫・炭化物を多く含む黒褐色シルト、包含層3層は最大厚2cmで焼土・焼礫を若干含む黒褐色シルトで、いずれも人為起源の堆積層である。

〔出土土器〕 層ごとに出土土器を記述する。石器に関しては後述する。

a. 包含層1層出土土器（第20図）

4点、図化した。1は纖維土器片で、古い時期の土器の流れ込みによるものである。

b. 包含層2層上面～2層中出土土器（第21図）



第20図 SX03遺物包含層・1層出土土器

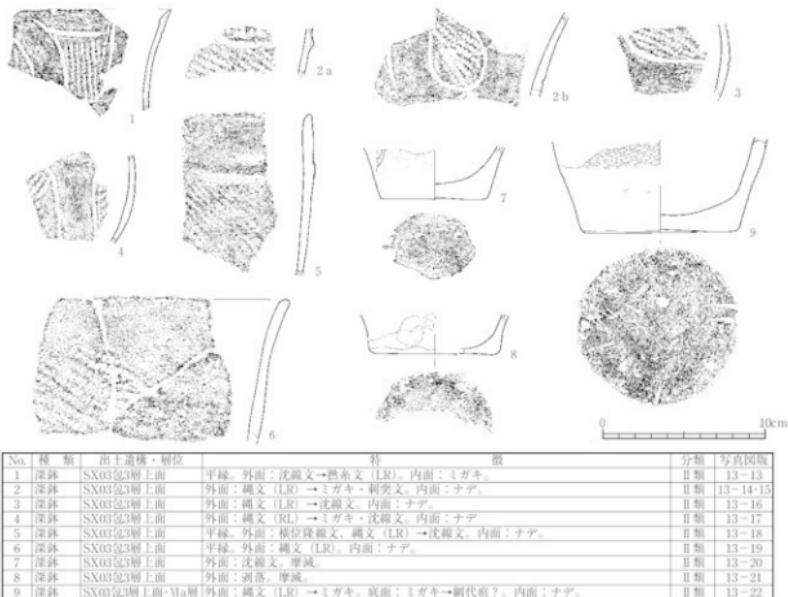


第21図 SX03遺物包含層・2層上面～2層中出土土器

8点、図化した。1は繊維土器片で、古い時期の流れ込みによるものである。環状把手(2)、方形区画文の一種(4)、先端部にヒレ状隆線文(突起)を伴うJ字状に無文部が垂下する文様(5)などがある。

c. 包含層3層上面出土土器(第22図)

9点、図化した。無文帶が文様として展開するもの(1・2・4)がある。地文には縄文と撫糸文(1)がある。底部破片が3点ある。



第22図 SX03遺物包含層・3層上面出土土器

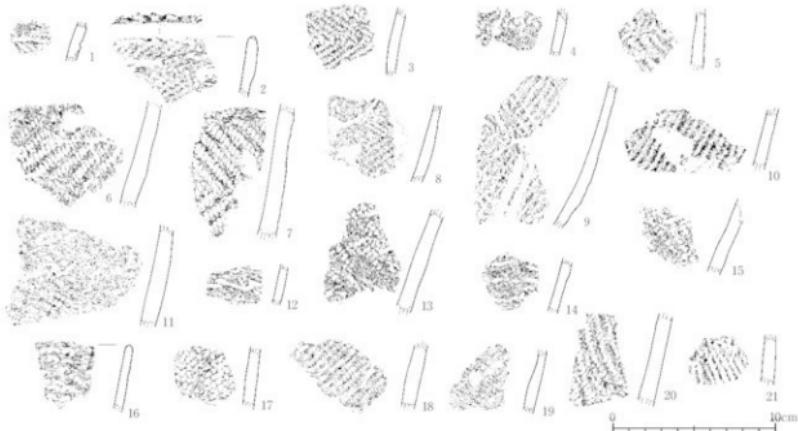
③ VI層

北側の調査区ほぼ全体に認められる暗褐色～黒褐色シルト層である。斜面の下方では色調によって、2層に細分された。層ごとに出土土器を記述する。石器に関しては後述する。

a. VIa層中出土土器(第23~26図)

71点図化した。第23図に図示した21点はすべて繊維土器で、古い時期の流れ込みによるものと考えられる。縄の側面圧痕文と短沈線文の文様意匠を持つもの(1)、結束羽状縄文(2~4)、非結束羽状縄文(5~8)、交差状縄文(9~10)、横走結節(綾織)文(11~15)、側面環付文(16)、組紐回転文(17)、縄文(18~20)、交差状撫糸文(21)がある。

第24・25図が比較的接合状況の良く、この層で主体となるものである。第24図1~4は環状把手を伴い、5~7の口縁部には刺突の点列がある。口縁部～胴部の文様は、無文部が文様として器面



No.	種類	出土遺構・層位	特徴	分類	写真図版
1	深鉢	Vla層	外面：縄（R）の横面圧痕文（無い強張）、斜位の折沈縞文。内面：ナデ。胎土：纖維を含む。摩滅。	I類	14-1
2	深鉢	Vla層	平縞+指跡状压痕。外面：「結束第1種羽状縞文」（LR=RL）。内面：ナデ。胎土：纖維を含む。	I類	14-2
3	深鉢	Vla層	外面：結束第1種羽状縞文（LR=RL）。内面：ナデ。胎土：纖維を含む。	I類	14-3
4	深鉢	Vla層	外面：結束第1種羽状縞文（LR=RL-02多条）。内面：ナデ。胎土：纖維を含む。補修孔。	I類	14-4
5	深鉢	Vla層	外面：非結束羽状縞文（LR=RL-0123条一横回転）。内面：ナデ。胎土：纖維を含む。	I類	14-5
6	深鉢	Vla層	外面：非結束羽状縞文（LR=L、LRL-1P23条一横回転）。内面：ナデ。胎土：纖維を含む。摩滅。	I類	14-6
7	深鉢	Vla層	外面：非結束羽状縞文（LR=RL横回転）。内面：ナデ。胎土：纖維を含む。摩滅。	I類	14-7
8	深鉢	Vla層	外面：非結束羽状縞文（LR=RL-0123条一横回転）。内面：ナデ。胎土：纖維を含む。摩滅。	I類	14-8
9	深鉢	Vla層	外面：交差状縞文（LR=RL-023条一横回転）。内面：ナデ。胎土：纖維を含む。	I類	14-9
10	深鉢	Vla層	外面：交差状縞文（LR=RL-02多条一横回転）。内面：ナデ。胎土：纖維+海綿状骨針を含む。摩滅。	I類	14-10
11	深鉢	Vla層	外面：縞文（RL）+筋縞文。内面：ナデ。胎土：纖維を含む。摩滅。	I類	14-11
12	深鉢	Vla層	外面：縞文（RL）+筋縞文。内面：ナデ。胎土：纖維を含む。	I類	14-12
13	深鉢	Vla層	外面：縞文（RL）+筋縞文。内面：ナデ。胎土：纖維を含む。	I類	14-13
14	深鉢	Vla層	外面：縞文（RL？）+筋縞文。内面：ナギサ、炭化物付着。胎土：纖維を含む。摩滅。	I類	14-14
15	深鉢	Vla層	外面：縞文（RL）+筋縞文。内面：ナデ。胎土：纖維を含む。	I類	14-15
16	深鉢	Vla層	平縞。外面：側面圧痕。内面：ナデ。摩滅。	I類	14-16
17	深鉢	Vla層	外面：縞文（LR=RL-1P右巻）回転文。内面：ナデ。胎土：纖維+海綿状骨針を含む。	I類	14-17
18	深鉢	Vla層	外面：縞文（LR=RL-02多条）。内面：ナデ。胎土：纖維を含む。	I類	14-18
19	深鉢	Vla層	外面：非結束羽状縞文（LR=LR横回転）。内面：ナデ。胎土：纖維を含む。摩滅。	I類	14-19
20	深鉢	Vla層	外面：縞走紋（RL-02多条）。内面：ナデ。胎土：纖維を含む。摩滅。	I類	14-20
21	深鉢	Vla層	外面：交差状縞文（L）。内面：ナデ。胎土：纖維を含む。	I類	14-21

第23図 Vla層中出土土器（1）

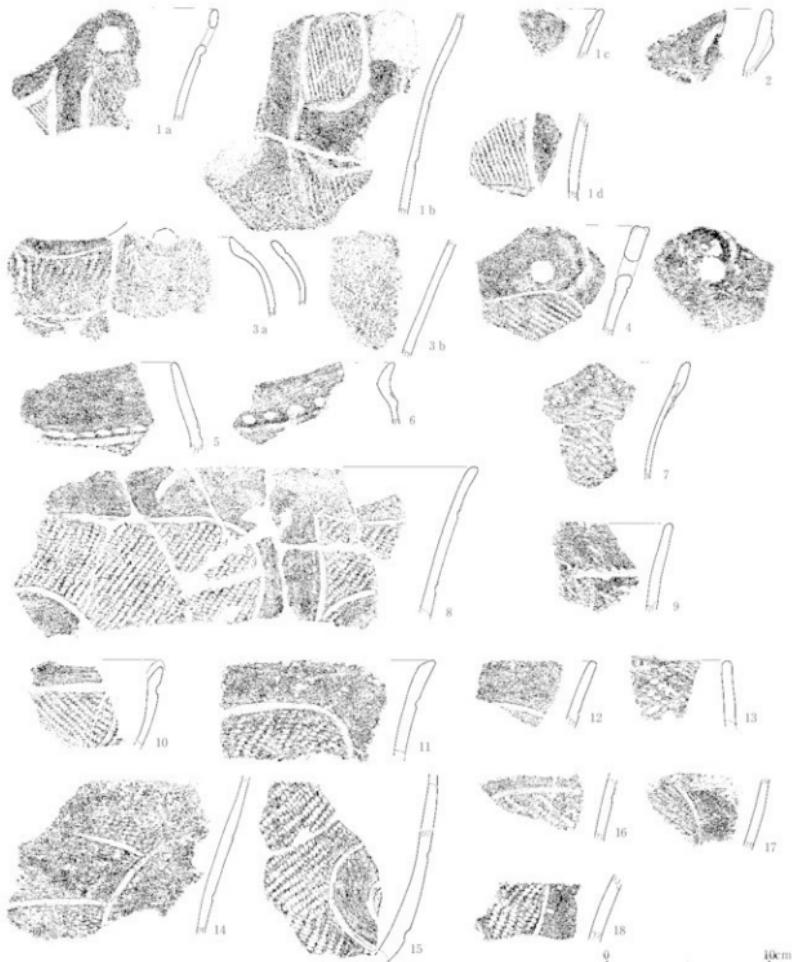
全体に展開し、地文部が梢円形状をなすもの（1）、方形状をなすもの（3）等がある。ヒレ状隆線文（突起）を伴いもの（1・4）等がある。第25図17は細線によって多重弧線文が描かれた袖珍土器である。同図18はやや上面観が梢円形状をなす袖珍土器である。同図22の底面には、ミガキ残された部分に木葉痕を残し、さらに剥落部にも木葉痕が残されている。

第26図1環状把手の周囲に刺突列を持つものや、同図2の縦位隆線文に2個1対の刻目文を持つものも同期のものと考えられる。

後世の攪乱等によって上位の層から混入したと見られる土器片が第26図3～10である。口縁部に縄文帯を持つもの（3）、薄手の無文土器（4）、刻目を伴う縦位隆線文（5）、横位弧状沈線文（6）、薄手の羽状縞文（7）などがある。

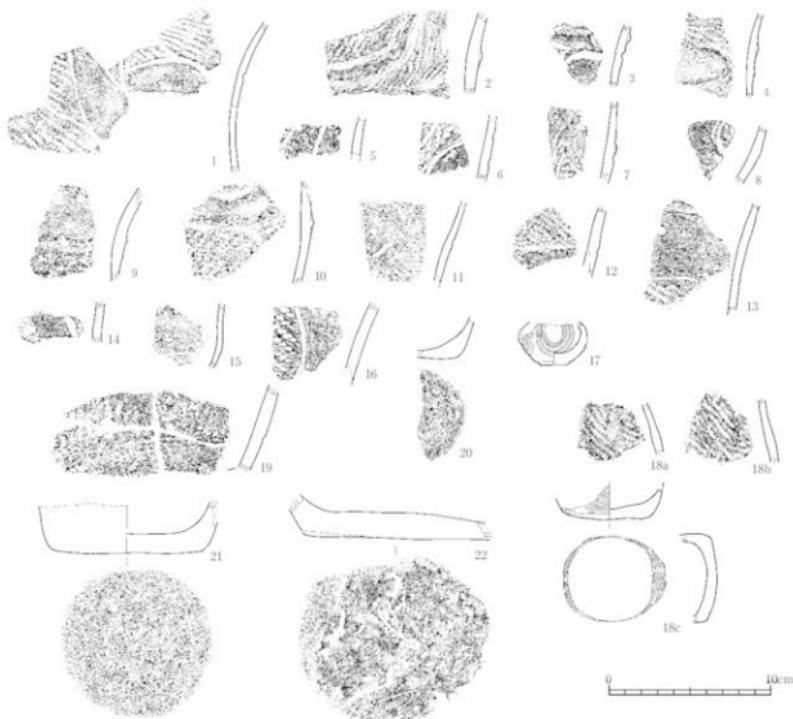
b. VIb層上面～b層中出土土器（第27図）

VIb層上面からやまとった資料（1）が得られている。胴部全体に縄文が施され、底面近く



No.	種類	出土遺構・層位	特徴	分類	写真図版
1	石斧	溝底跡、縫合部	石斧。縫合部に平行な直線状の刃部。表面・刃部にレッド繪文・沈繪文・灰化物付着。内面：ミガキ。直幅：10mm。	直幅	14-23
2	石斧	溝底跡	石斧。縫合部に平行な直線状の刃部。表面・刃部にレッド繪文・沈繪文・内面：ミガキ。	直幅	14-23
3	石斧	溝底跡	石斧。縫合部に平行な直線状の刃部。表面・刃部にレッド繪文・沈繪文・内面：ミガキ。縫合による表面凹凸。	直幅	14-24
4	石斧	溝底跡	石斧。縫合部に平行な直線状の刃部。表面・刃部にレッド繪文・内面・縫合部にレッド繪文。表面・刃部にミガキ。内面：ミガキ。	直幅	14-25
5	石斧	溝底跡	石斧。縫合部に平行な直線状の刃部。表面・刃部にレッド繪文・内面：ミガキ。	直幅	14-26
6	石斧	溝底跡	石斧。縫合部に平行な直線状の刃部。表面・刃部にレッド繪文・内面：ミガキ。	直幅	14-27
7	石斧	溝底跡	石斧。縫合部に平行な直線状の刃部。表面・刃部にレッド繪文・内面：ミガキ。	直幅	14-28
8	石斧	溝底跡	石斧。縫合部に平行な直線状の刃部。表面・刃部にレッド繪文・内面：ミガキ。	直幅	14-29
9	石斧	溝底跡	石斧。縫合部に平行な直線状の刃部。表面・刃部にレッド繪文・内面：ミガキ。	直幅	14-30
10	石斧	溝底跡	石斧。縫合部に平行な直線状の刃部。表面・刃部にレッド繪文・内面：ミガキ。	直幅	14-31
11	石斧	溝底跡	石斧。縫合部に平行な直線状の刃部。表面・刃部にレッド繪文・内面：ミガキ。	直幅	14-32
12	石斧	溝底跡	石斧。縫合部に平行な直線状の刃部。表面・刃部にレッド繪文・内面：ミガキ。	直幅	14-33
13	石斧	溝底跡	石斧。縫合部に平行な直線状の刃部。表面・刃部にレッド繪文・内面：ミガキ。	直幅	14-34
14	石斧	溝底跡	石斧。縫合部に平行な直線状の刃部。表面・刃部にレッド繪文・内面：ミガキ。	直幅	14-35
15	石斧	溝底跡	石斧。縫合部に平行な直線状の刃部。表面・刃部にレッド繪文・内面：ミガキ。	直幅	14-36
16	石斧	溝底跡	石斧。縫合部に平行な直線状の刃部。表面・刃部にレッド繪文・内面：ミガキ。	直幅	14-37
17	石斧	溝底跡	石斧。縫合部に平行な直線状の刃部。表面・刃部にレッド繪文・内面：ミガキ。	直幅	14-38
18	石斧	溝底跡	石斧。縫合部に平行な直線状の刃部。表面・刃部にレッド繪文・内面：ミガキ。	直幅	14-39

第24図 Via層中出土土器 (2)

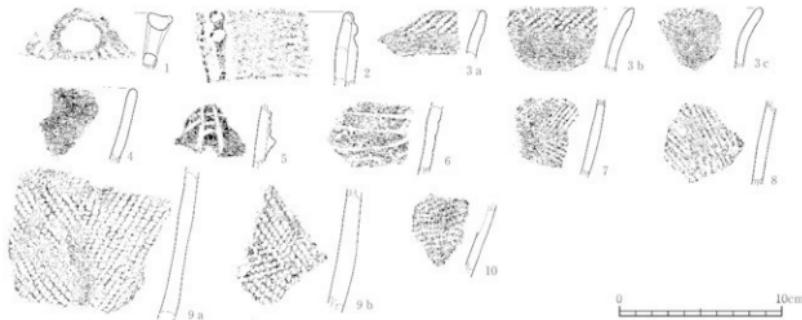


No.	種類	出土遺構・層位	特徴	分類	参考図版
1	深鉢	Vla層	外面：縦文（LR）→ミガキ、沈線文、炭化物付着。内面：ナデ。	Ⅱ相	14-40
2	深鉢	Vla層	外面：クラック状文の一部。縫合文→縫合文。内面：ナデ。	Ⅱ相	14-41
3	深鉢	Vla層	外面：ヒレ状跡文→沈線文。内面：ミガキ。	Ⅱ相	14-42
4	深鉢	Vla層	外面：ヒレ状跡文→縫合文。内面：ミガキ。	Ⅱ相	14-43
5	深鉢	Vla層	外面：縫合文（LR）→沈線文。内面：ナデ。	Ⅱ相	14-44
6	深鉢	Vla層	外面：縫合文（LR）→沈線文。内面：ミガキ。	Ⅱ相	14-45
7	深鉢	Vla層	外面：縫合文→沈線文。内面：ナデ。	Ⅱ相	14-46
8	深鉢	Vla層	外面：縫合文、沈線文。内面：ナデ。	Ⅱ相	14-47
9	深鉢	Vla層	外面：縫合文（LR）→沈線文。内面：ミガキ、摩滅。	Ⅱ相	14-48
10	深鉢	Vla層	外面：縫合文（LR）→沈線文。内面：ミガキ、内面：ナデ、摩滅。	Ⅱ相	14-49
11	深鉢	Vla層	外面：縫合文（LR）→沈線文。内面：ナデ、摩滅。	Ⅱ相	14-50
12	深鉢	Vla層	外面：縫合文→縫合文（LR）。内面：ナデ。	Ⅱ相	14-51
13	深鉢	Vla層	外面：縫合文（LR）→沈線文。内面：ナデ。	Ⅱ相	14-52
14	深鉢	Vla層	外面：沈線文。内面：ナデ。	Ⅱ相	15-1
15	深鉢	Vla層	外面：縫合文（LR）→ミガキ。内面：ナデ、摩滅。	Ⅱ相	15-2
16	深鉢	Vla層	外面：縫合文（LR）→ミガキ→沈線文。内面：ナデ。	Ⅱ相	15-3
17	施形土器	Vla層	外面：多量縫合文（厚壁）。内面：丁程ねじ状、筋上、白色色画者。	Ⅱ相	15-4
18	施形土器	Vla層	外面：縫合文（LR）。内面：ナデ。丁程ねじ状。	Ⅱ相	15-5
19	深鉢	Vla層	外面：縫合文（LR）。内面：ナデ、摩滅。	Ⅱ相	15-6
20	深鉢	Vla層	外面：ナデ、底面：摩滅。内面：ナデ。	Ⅱ相	15-7
21	深鉢	Vla層	外面：ナデ、底面：摩滅。内面：ナデ。	Ⅱ相	15-8
22	深鉢	Vla層	外面：ナデ、底面：ナラ根痕。内面：ナデ。	Ⅱ相	15-9

第25図 Vla層中出土土器（3）

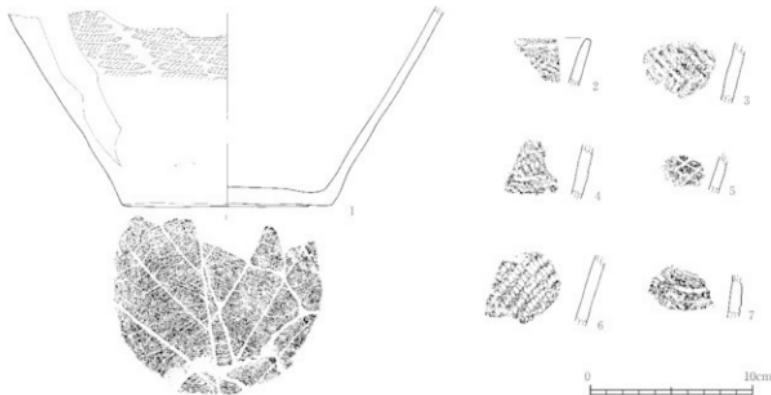
にミガキが施される深鉢形土器である。底面には木葉痕が残されている。

Vlb層中は6点図化した。うち、5点が織維土器である。7は織維を含まない多条沈線による文様が描かれており、より上位の層からの混入の可能性がある土器である。同一個体と見られる破片がV層中（第28図11）にある。



No.	種類	出土遺構・層位	特徴	分類	写真図版
1	深鉢	Vla層	環状把手(内面の無文帶と外面の無文帯がミエウス環状につながる)。 外面: 沈縞文、剥突文。内面: ミガキ。	II類	15-10
2	深鉢	Vla層	平様。外面: 横走縞文 (LR, 3-1段多条) → 側位斜縞文→剥目文。内面: ナデ。	II類	15-11
3	深鉢	Vla層	平様。外面: 縞文 (LR)。内面: ナデ。	その他	15-12
4	深鉢	Vla層	平様。外面: 無文 (ミガキ)。内面: 摩滅。	その他	15-13
5	深鉢	Vla層	外面: 側位斜縞文+剥目文、沈縞文。内面: ナデ。	その他	15-14
6	深鉢	Vla層	外面: 沈縞文 (横位、横位弧状)。内面: ナデ。	その他	15-15
7	深鉢	Vla層	外面: 非結束羽状縞文 (LR, RL)。内面: ナデ。	その他	15-16
8	深鉢	Vla層	外面: 縞文 (RL, O形多条)。内面: ナデ。	その他	15-17
9	深鉢	Vla層	外面: 同一原体による環状縞文 (RL側面斜・横回転)。内面: ナデ。	その他	15-18
10	深鉢	Vla層	外面: 横走縞文 (LR斜回転)。内面: 摩滅。	その他	15-19

第26図 Vla層中出土土器 (4)



No.	種類	出土遺構・層位	特徴	分類	写真図版
1	深鉢	Vlb層上面一括	外面: 縞文 (LR)。底面: 木葉痕。内面: ナデ。	II類	15-20
2	深鉢	Vlb層中	平様。外面: 縞文 (LR→LR重複施文)。内面: ナデ。胎土: 繊維を含む。	I類	15-21
3	深鉢	Vlb層中	外面: 非結束羽状縞文 (LR, RL)。内面: ナデ。胎土: 繊維を含む。	I類	15-22
4	深鉢	Vlb層中	外面: 縞文 (RL) + 結節文。内面: ナデ。胎土: 繊維を含む。	I類	15-23
5	深鉢	Vlb層中	外面: 網目状撚糸文 (L)。内面: ミガキ。胎土: 繊維を含む。	I類	15-24
6	深鉢	Vlb層中	外面: 縞文 (LR)。内面: ナデ。胎土: 繊維を含む。	I類	15-25
7	深鉢	Vlb層中	外面: 縞文 (LR) → 沈縞文。内面: ミガキ。	その他	15-26

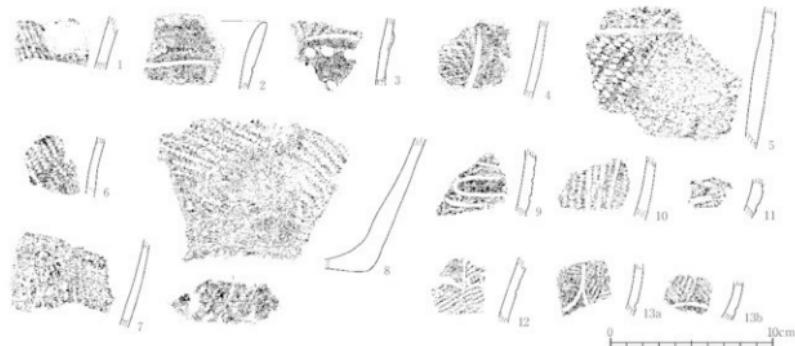
第27図 Vlb層上面～b層中出土土器

④ V層（第28図）

古代の遺物とともに出土した土器片である。縄文時代前期初頭～後期中葉までの土器があり、再堆積したものである。

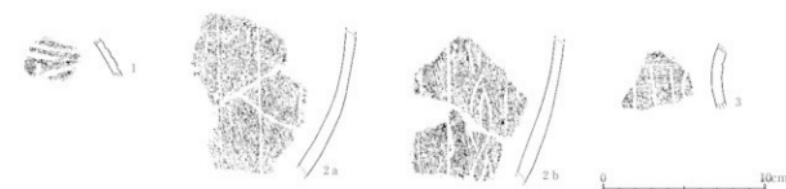
⑤ 南側Vc層（第29図）

南側の調査区Vc層中から1～3の土器が出土した。1は壺形土器、2・3は縦位の連鎖状沈線文の施された深鉢形土器である。調査区が離れており、北側調査区との層位的な関係は不明である。



No.	種類	出土遺構・層位	特徴	分類	写真図版
1	深鉢	V層中	外面：縄文（RL-O及び多条縄回転）。内面：ミガキ。胎土：礫織を含む。	I層	15-27
2	深鉢	V層中	平縁：縄文（LR？）、沈縄文。内面：ミガキ。摩減。	II層	15-28
3	深鉢	V層中	外縁：縄文（RL）→複縄文、ミガキ、沈縄文、柄突文。内面：ミガキ。	II層	15-29
4	深鉢	V層中	外縁：縄文（LR縄回転→LR横回転の重複縄文）→沈縄文。内面：ナデ。	II層	15-30
5	深鉢	V層中	外縁：縄文（RLR-O及び多条）→沈縄文。内面：ナデ。	II層	15-31
6	深鉢	V層中	外縁：縄文（LR）。内面：ナデ。	II層	15-32
7	深鉢	V層中	外縁：縄文（LR）。内面：摩減。	II層	15-33
8	深鉢	V層中	外縁：縄文（LR）。底面：木素底。内面：ナデ。	II層	15-34
9	深鉢	V層中	外縁：縄文（RL）→沈縄文。内面：ナデ。	その他	15-35
10	深鉢	V層中	外縁：縄文（RL）→多条沈縄文。内面：ナデ。	その他	15-36
11	深鉢	V層中	外縁：縄文（LR）→沈縄文。内面：ミガキ。	その他	15-37
12	深鉢	V層中	外縁：縄文（LR）→沈縄文。内面：ナデ。	その他	15-38
13	深鉢	V層中	外縁：同一原体による羽状縄文（RL）→沈縄文。内面：ナデ。	その他	15-39

第28図 V層中出土土器



No.	種類	出土遺構・層位	特徴	分類	写真図版
1	深鉢	南側Vc層中	外面：沈縄文。内面：ミガキ。摩減。	その他	15-40
2	深鉢	南側Vc層中	外面：撲突文（L？）→沈縄文。内面：ミガキ。摩減。	その他	15-41
3	深鉢	南側Vc層中	外面：撲突文（R）→沈縄文。内面：ナデ。	その他	15-42

第29図 南側Vc層中出土土器

⑥ 出土石器（第30図）

各遺構・遺物包含層・基本層序から出土した縄文時代の石器である。石鋸（1・2）、石匙（3～5）、石範（6～8）、不定形石器（9・10）がある。土器の年代から、縄文時代前期初頭、中期末葉～後期中葉に属するものと考えられる。



No.	器種	出土遺構・層位	特徴	長	幅	厚
1	石鋸	SX03Ⅰ層	河原。珪化凝灰岩？	25	17	0.4
2	石鋸	V層中	河原。玉髓。	21	13	0.5
3	石匙	SD11堆積土	緩斜。珪化凝灰岩？	51	17	0.6
4	石匙	V層中	緩斜。珪化凝灰岩？つまみ部欠損。	(5.5)	19	0.6
5	石匙	遺構確認	横型。珪質頁岩。	55	49	1.0
6	石鋸？	V層中	一端欠損。珪質頁岩。	6.8	22	1.0
7	石匙	SD02堆積土	扭曲欠損。珪質頁岩。	(29)	(33)	(0.9)
8	石匙	V層中	新しいホツ。珪質頁岩。	(38)	18	1.1
9	測片	V層中	微細剥離痕ある測片。珪質頁岩。	3.1	39	1.1
10	測片	V層中	微細剥離痕ある測片。黒曜石。	2.3	20	1.0

第30図 出土石器

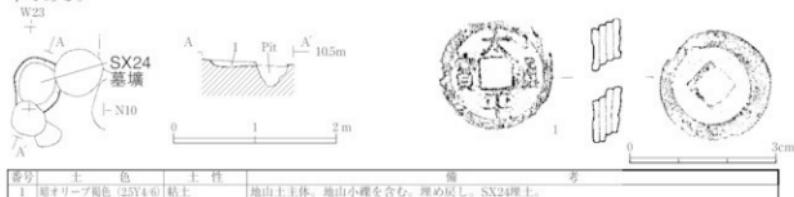
C. 中近世以降の遺構と遺物

中近世の遺構として、SX24墓壙 1基、SB28～38掘立柱建物跡11棟以上がある。

1. 墓壙

【SX24墓壙】(第31図)

中近世以降の掘立柱建物跡に壊され、さらに現代の建物基礎等によって大きく削平されている。平面形は長軸66cm以上、短軸56cmの楕円形で、深さ6cm、断面形は皿状を呈している。埋土は地山ブロックを含む暗オリーブ褐色シルトである。副葬品として六道錢が出土している。六道錢は鋸で4枚密着しており、表面の1枚しか文字を読み取ることができない。「太平通寶」と記された北宋錢である。錢の状態はいずれも良好で、薄く磨耗したいわゆる「鏹錢」と呼ばれる粗悪錢ではない。初鑄は976年である。



第31図 SX24墓壙・出土遺物

2. 掘立柱建物跡

現在の建物敷地の搅乱・盛土を剥ぐと、柱穴群が検出された。旧河道の北側で、現河道の南北にまたがって検出された。主要な柱穴の切り合い関係から大きく3時期に分けられる。柱穴の分布が立ち退いた現在の建物の範囲と概ね一致しており、現建物に先行する建物群と考えられる。

建物規模などについては第1表のとおりである。

【SB28掘立柱建物跡】(第32図)

主柱は概ね二つの柱穴が切り合っており、規模を変えて1回建て替えが行われている。新しい時期に西側に2間拡張している。P1～8の部分が主屋に相当する部分で、東西4間、南北1間である。P9～11の2間分は南縁ないしは南庇である。

【SB36掘立柱建物跡】(第32図)

SB28の旧建物跡の柱列の延長上に検出された東西2間・南北2間の建物跡である。位置関係からSB28旧建物跡に接続していた可能性もある。

【SB33掘立柱建物跡】(第32図)

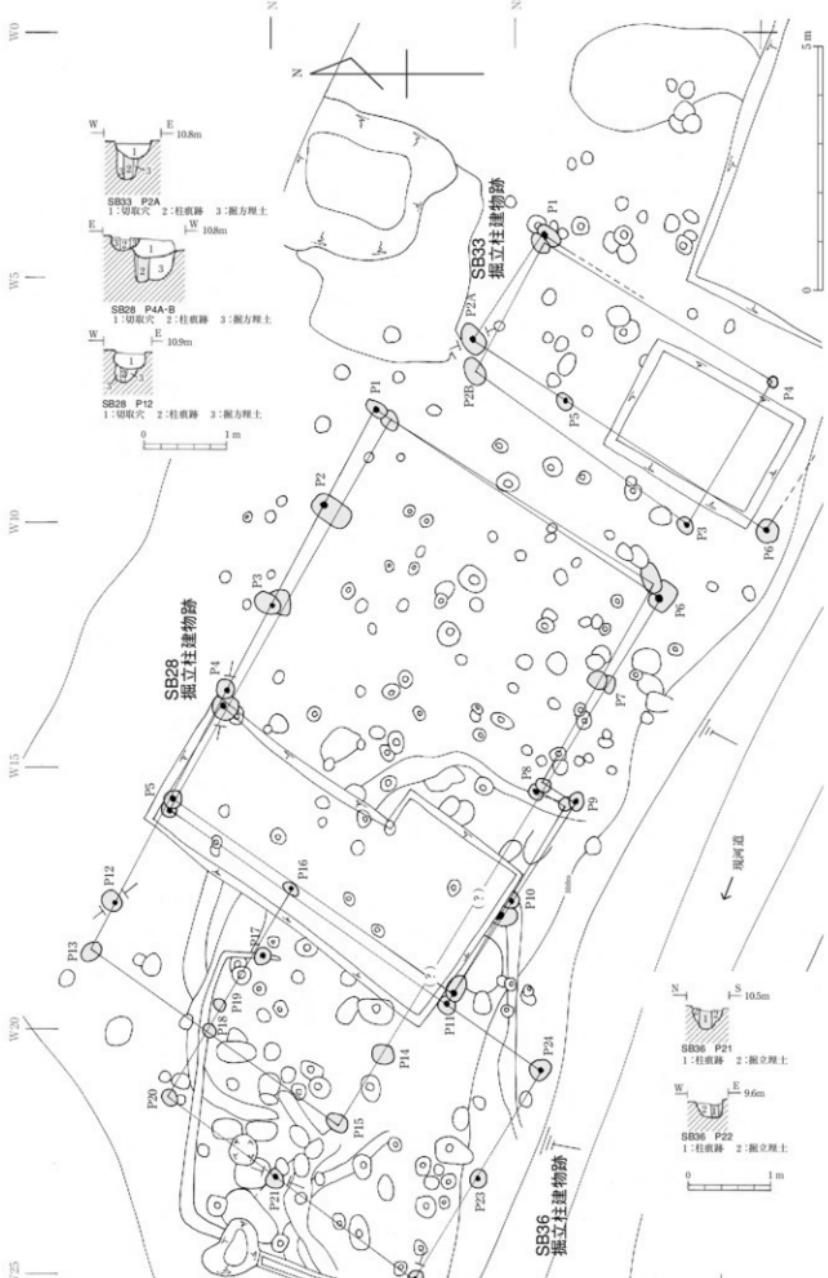
主柱はほぼ同一位置で建て替えが行われている。東西1間、南北1間以上の細長い建物跡である。

【SB29掘立柱建物跡】(第33図)

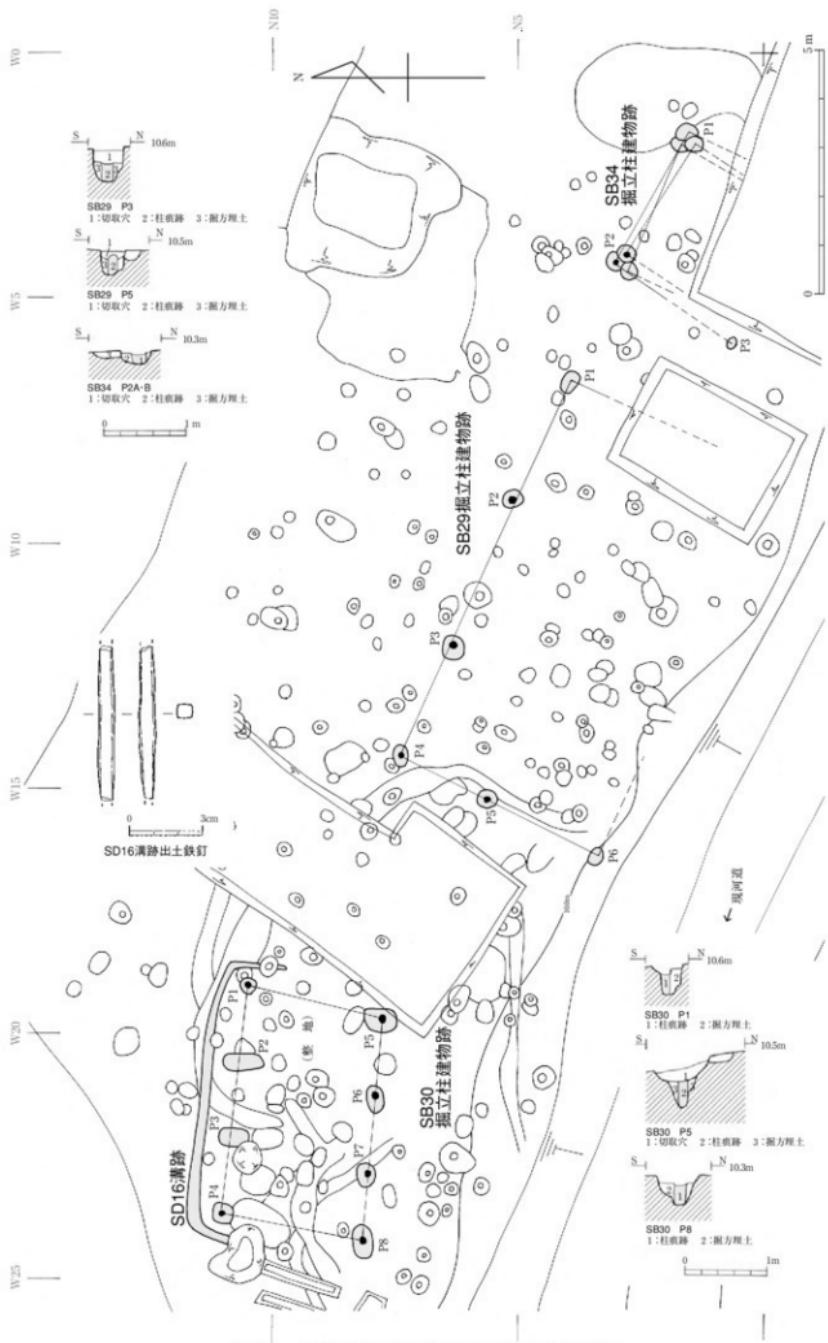
2間×3間の東西棟が主屋に相当する。建て替えは行われていない。

【SB30掘立柱建物跡】(第33図)

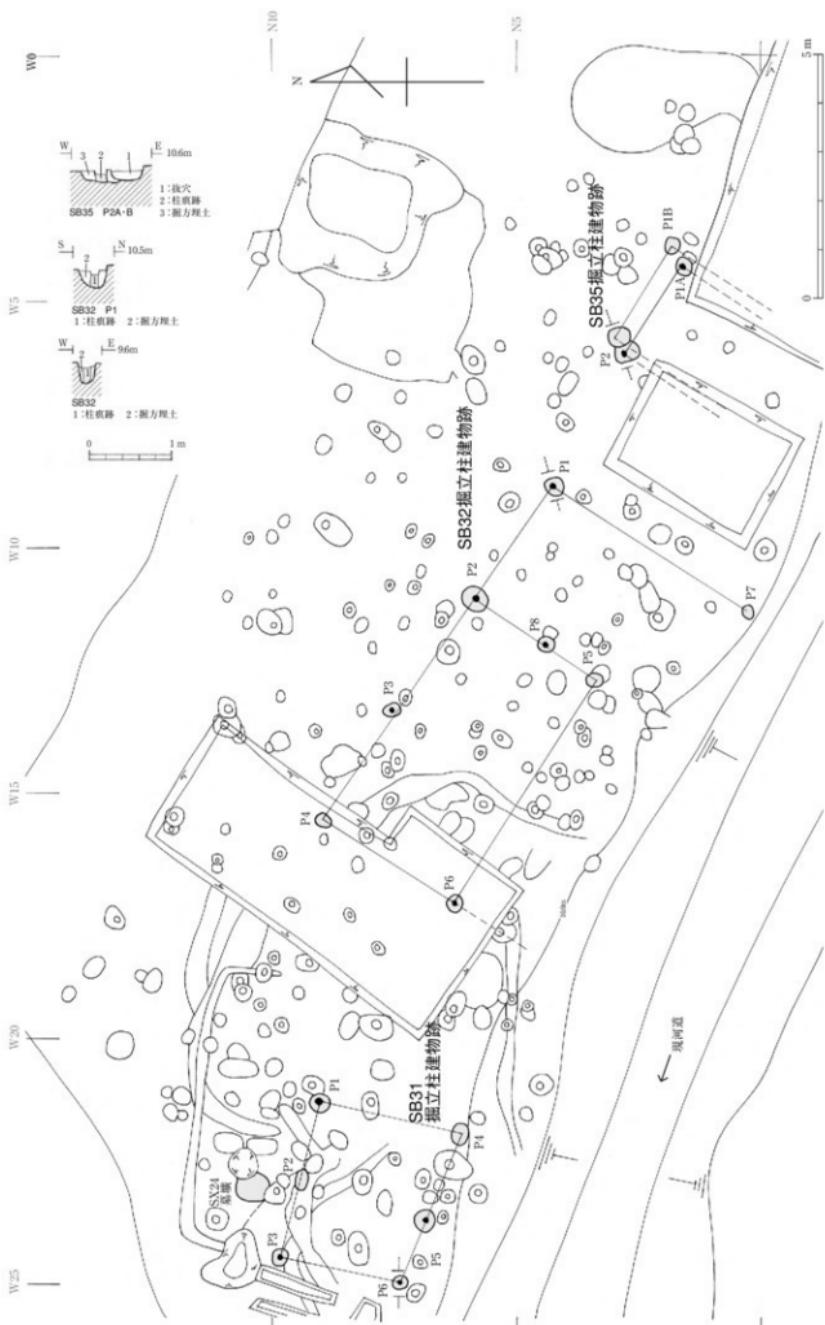
1間×3間の東西棟である。雨落ち溝SD16を伴う。北側では一部整地層が認められた。建て替えは行われていない。鉄釘1本がSD16から出土している。



第32図 中近世以降の掘立柱建物跡（1）（北側調査区）



第33図 中近世以降の掘立柱建物跡（2）（北側調査区）



【SB34掘立柱建物跡】（第33図）

ほぼ同じ位置で2回建て替えが行われている。東西1間、南北1間以上の建物である。SB29主屋北側桁行とはほぼ同じ柱列となっている。

【SB32掘立柱建物跡】（第34図）

南北1間以上、東西3間の東西棟が主屋に相当する。建て替えは行われていない。

【SB31掘立柱建物跡】（第34図）

1間×2間の東西棟である。建て替えは行われていない。位置関係ではSX24墓塚と重複しない建物跡になる。

【SB34掘立柱建物跡】（第34図）

北妻1間の建物跡と見られる。ほぼ同一位置で建て替えが行われている。SB32主屋北側桁行とは同じ柱列となっている。

【SB37掘立柱建物跡】（第35図）

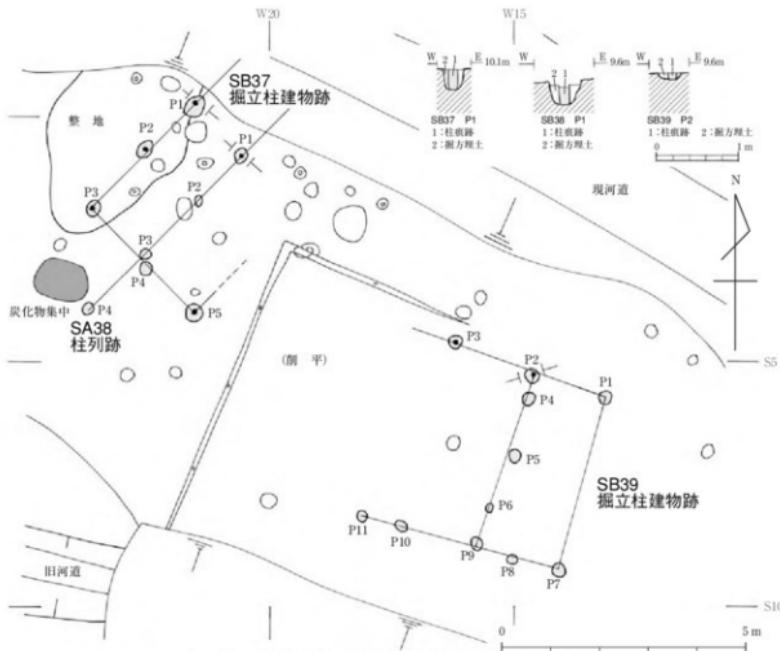
2間×2間以上の建物跡である。P1～3は整地層を切っている。

【SA38柱列跡】（第35図）

P1～4の柱列跡である。詳細は不明である。

【SB39掘立柱建物跡】（第35図）

2間×2間以上の建物跡である。補助柱を伴っている。



第35図 中世以降の掘立柱建物跡（4）（南側調査区）

遺構名	SB38	SB36	SB33
規模	東西3間×南北1間	東西2間×南北2間	東西1間×南北1間以上
方向	東西横 南北横	南北横	南北横
建て替え	なし	なし	1回
柱径	9.0m	6.1m	2.1m
桁行	2.5, 2.2, 2.1, 2.2m	3.5, 2.6m	3.0 (木造のため不明)
梁行	6.5m (東妻)	5.0m (南妻)	2.6m (北妻)
備考	土層相当・新規に基づくSB38は既存に複数か?		

遺構名	SB39	SI30	SI34
規模	東西3間×南北2間	東西3間×南北1間	東西1間×南北1間以上
方向	東西横 南北横	東西横 南北横	南北横
建て替え	なし	なし	なし
柱径	8.5m	4.6m	4.6m
桁行	2.4, 3.2, 2.9m	1.5, 1.5, 1.6m	4.6m (西妻)
梁行		2.8m (東妻)	2.6m (北妻)
備考	土層相当	SD16南落葉を採り	

遺構名	SI32	SI31	SI33
規模	東西3間×南北2間?	東西2間×南北1間	東西1間×南北1間以上
方向	東西横 南北横	東西横 南北横	南北横
建て替え	なし	なし	1回
柱径	8.2m	3.3m	複数のため不明
桁行	2.6, 2.8, 2.8m	1.6, 1.7m	2.2m (北妻)
梁行	4.8m (東妻)	3.0m (東妻)	2.2m (北妻)
備考	土層相当		

第1表 中世以降の掘立柱建物跡一覧

III 考察

1. 遺物について

出土遺物には、土師器、須恵器、赤焼土器、瓦、鉄製品、石製品、縄文土器、石器、古銭などがある。

(1) 古代の土器

古代の土器には、ロクロ調整土師器、須恵器、赤焼土器がある。竪穴住居跡からまとまって出土した土器は少ないため、種類ごとの分類は行わず、出土遺構ごと個別に年代を検討することにする。

赤焼土器は、壺類がSI01・SI06・SI09・SI10竪穴住居跡の暗渠内堆積土や床、貯蔵穴から出土している。比較的大型のもので、高く外側へ聞く台の付くものもある。赤焼土器壺類の出現は10世紀前葉ころ（多賀城跡調査研究所：1998）とされており、これらの住居跡出土遺物もほぼ同様の年代観をもって捉えることができる。

SI02竪穴住居跡では、床面から土師器と須恵器が出土しているほか、暗渠の蓋として使われたロクロ調整の土師器甕が出土している。土師器はすべてロクロ調整のもので、壺は体部下半に手持ちヘラケズリを施したもの、暗渠の蓋として使われた甕は体部下半部にヘラ削り調整を施したものである。須恵器は回転ヘラ切り・付け高台の須恵器壺片と甕の体部破片の転用甕がある。また、堆積土から須恵器壺の底部回転糸切りで調整が施されていないものと回転ヘラ切りのものが出土している。このような特徴を持つ土師器はこれまでの土器研究によれば、9世紀代以降のものと考えられ、非ロクロ調整の土師器と赤焼土器がともに出土していないことから、ほぼ9世紀代に限定することができる。

(2) 瓦

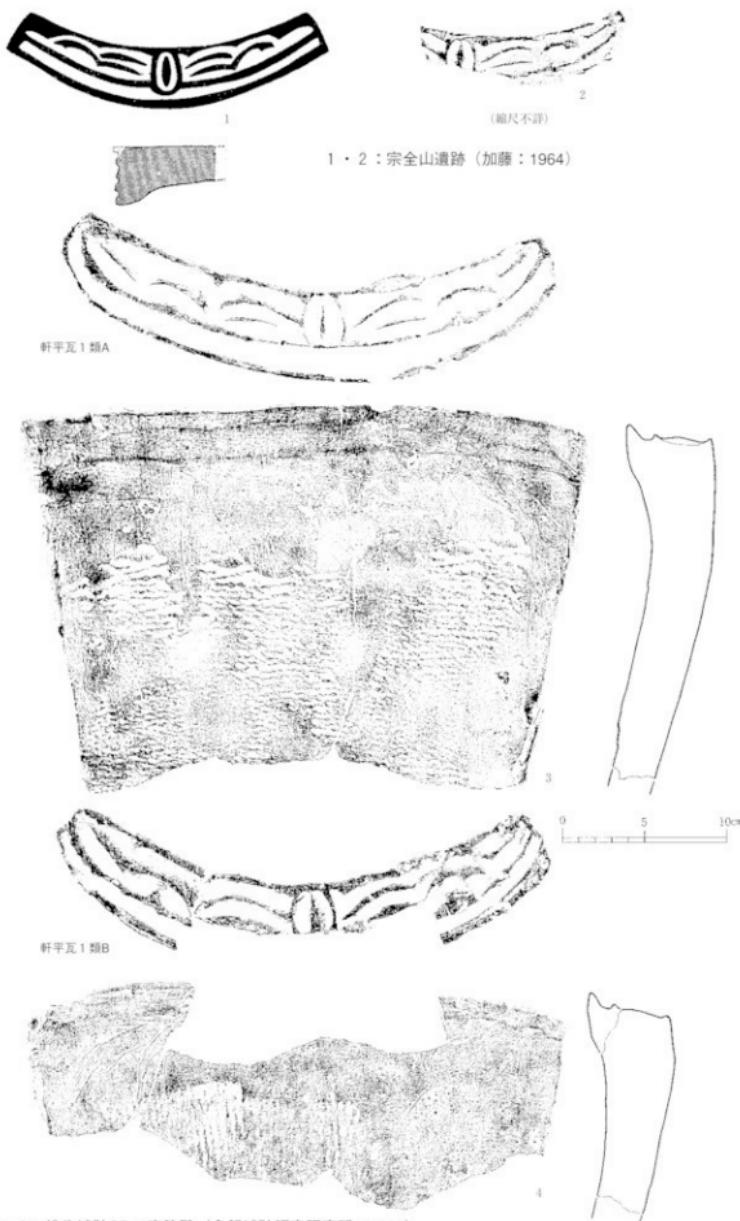
SI02竪穴住居跡の暗渠には、軒平瓦を含む平瓦が多数使用されていた。瓦当文様は范による均整唐草文である。類似の資料（第36図）は桃生城跡（註1）や本遺跡に隣接する宗全山遺跡（註2）で発見されている。

(3) 縄文土器

縄文土器はVI b層から胎土に纖維を含む前期の土器（I類）とVI a層及びSX03遺物包含層・SX23土器埋設遺構から中期の土器（II類）が出土している。その他、攪乱や表土から後期の土器が少量出土している。

① I類土器

胎土に纖維を含む土器である。文様意匠に縄の側面圧痕文と短沈線文の組み合わせによるもの（第23図1）があり、地文の縄文に結束第1種・非結束の羽状縄文が多く見られる。こうした全般的な特徴は「上川名式」（伊東：1957）とされるものと一致し、前期初頭に位置づけられている。このほか、細谷B遺跡I類土器の特徴として、a結節文（綾縄文）が横走するもの、b網目状撚糸文、c組紐回転文、d側面環付がある点などを指摘することができる。これらの特徴は上川名式後半ころのものと考えられる。このうち、結節文は室浜貝塚・金山貝塚・左道具塚（遺跡）など宮城県北半の貝塚や遺跡でより顕著な特色となっている。



3・4：桃生城跡SB16東脇殿（多賀城跡調査研究所：1995）

第36図 軒平瓦の類例

② II類土器

土器の文様は無文部が入り組み状に展開し、方形区画文・楕円形区画文・クランク状文、あるいはその一種で構成されるもので、「大木10式」（山内：1937）とされるものである。なかでも、いわゆるアルファベット状縄文などが展開する大木10式前半期のものは含んでおらず、中期末葉の「大木10式後半期」（須藤：1985）の特色をよく示している。環状把手やヒレ状隆線文(突起)もこの時期の一般的な特徴であり、矛盾しない。このほか、細谷B遺跡II類土器の特徴として、①縄文・撚糸文、隆線文、沈線文の手順が一定ではなく、縄文・撚糸文→隆線文と逆の隆線文→縄文・撚糸文、あるいは縄文・撚糸文→沈線文と逆の沈線文→縄文・撚糸文の手順が存在する。このことはすなわち、一概に地文の縄文・撚糸文を全体に施してから磨り消しのミガキを加えていく狭義の「磨り消し縄文」だけではなく、最終手順で縄文や撚糸文を充填する手順が存在することを示している。②隆線や沈線文に刺突文が並列するものや、隆線上に2個1対の刻目文が施されるものが存在する。こうした特徴は宮城県北部の宮戸鳥貝塚梨木圓貝塚（芳賀：1968）や石巻市南境貝塚7トレンチ（後藤：2004）において把握される一方、宮城県南部の白石市菅生田遺跡や七ヶ宿町大堀川遺跡ではほとんど認められず、宮城県北部と南部の地域差を示す特徴と考えられる。

③ その他の土器

このほかに、攪乱や再堆積によって入り込んだと見られる若干の縄文時代後期前葉～中葉の土器がある。

2. 遺構について

今回の調査で発見された遺構は、古代では堅穴住居跡6軒ほか、縄文時代では土器埋設遺構1基、遺物包含層1箇所、中世以降では墓壙1基、掘立柱建物跡11棟、柱列跡1条ほかを検出した。

a. 古代

赤焼土器を伴うSI01・SI06・SI09・SI10堅穴住居跡は10C前半ころ、赤焼土器を伴わずクロ調整窓の暗渠を持つSI02堅穴住居跡は9C代のものと考えられた。SI02堅穴住居跡は焼失住居であり、他の住居とは異なる様相を呈している。

b. 縄文時代

I類：前期初頭、II類：中期末葉ほかとして捉えられる土器が出土している。石器もほぼこの2時期のいずれかに属するものと考えられた。このうち、土器埋設遺構1基・遺物包含層1箇所が形成されたのは、II類の中期末葉である。

c. 中近世以降

明確な出土遺物がSX24墓壙から出土した六道銭とSD16溝跡から出土した鉄釘のみで、遺構の時期を特定することは難しい。六道銭に用いられた渡来銭の流通時期も概ね新寛永出現以前の17C中葉ころまでとされており、渡来銭の出土が即座に中世まで遡ることを意味するものではない。一方では、「太平通寶」の初鑄が976年であることから、中世まで遡る可能性もまた否定できない。ここでは掘立柱建物跡・柱列跡も含めて、中近世以降の遺構として把握（註3）しておく。

註

(註1) 桃生城跡の調査においても類似の瓦が出土している。多賀城跡調査研究所の第3次調査では、東脇殿の柱痕跡から軒平瓦（第36図3・4）が出土している。1類Aと降線部分を箱彫りして改范した1類Bがある。今回、細谷B遺跡から出土した軒平瓦の瓦当文様の降線部分は箱彫りにはなっておらず、桃生城跡1類Aに類似している。

(註2) 宗金山遺跡は昭和30、31年ごろ飯野川高校桃生分校大場氏・高倉氏によって調査が行われ、その成果は昭和36年刊行の『桃生村誌』においても紹介（加藤:1961）されている。昭和40年代には一部開田工事が行われ、その際も多数の瓦が出土し、その一部は地元の郷土史家が保管している。かつて瓦が出土したという場所を確かめてみると、丘陵の中腹あたりの斜面地で、現在瓦片などは確認されない。地形から窯跡の存在も予想されるが、詳細不明である。

(註3) 文献史料では、嘉永3年『風土記御用書上』中に見える太田村屋敷名の「細谷百姓家一軒、星敷跡一軒」に相当するものと思われるが、安永風土記などでは確認することができず、古くは異なる屋敷名で呼称されていた可能性もある。

IV　まとめ

- ① 今回の調査によって発見された遺構は、古代では竪穴住居跡6軒ほか、縄文時代では土器埋設遺構1基、遺物包含層1箇所、中近世以降では墓壙1基、掘立柱建物跡11棟、柱列跡1条ほかである。
- ② 古代の竪穴住居跡は焼失住居の1軒が9C代、他の5軒が10C前半ごろの年代で捉えられた。焼失住居の1軒の暗渠には、桃生城跡や隣接する宗金山遺跡で出土しているものと同様の瓦が用いられていた。
- ③ 縄文時代は中期末葉の土器埋設遺構1基・遺物包含層1箇所が確認された。このほか、前期初頭や後期の遺物が認められた。出土遺物には縄文土器と石器がある。
- ④ 中近世以降では、墓壙1基、掘立柱建物跡11棟、柱列跡1条ほかを検出した。出土遺物として鉄釘と六道鏡がある。

図版 1





1 SI06・SI08竪穴住居跡
(南西から)



2 SI06竪穴住居跡カマド
(南西から)



3 SI06竪穴住居跡遺物出土状況 (南西から)



4 SI06竪穴住居跡煙道断面 (南東から)



1 SI09竪穴住居跡（南から）



2 SI10竪穴住居跡（南から）



3 SI10竪穴住居跡貯藏穴（東から）



5 SX17（西から）



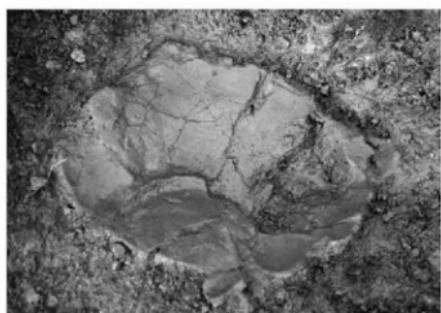
4 SD18・SX05（東から）



1 SD21・SD22周辺（西から）



2 SX23土器埋設遺構（西から）



3 VIb層上面土器出土状況（南から）



4 中近世以降の
掘立柱建物跡群（西から）



1 SX24墓壙（西から）



2 SB33掘立柱建物跡P 3（南から）



3 SB29掘立柱建物跡P 5・SD18溝跡（南から）



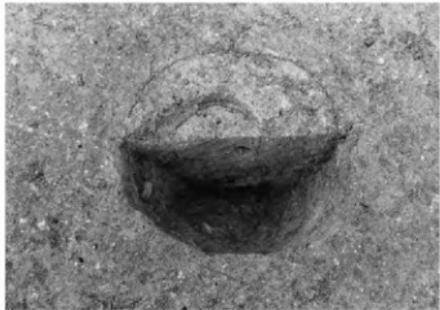
4 SB29掘立柱建物跡P 3（東から）



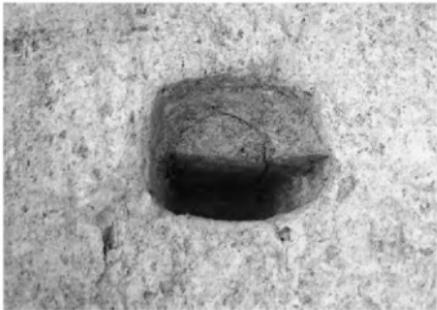
5 SB32掘立柱建物跡P 1（東から）



6 SB32掘立柱建物跡P 8（南から）



7 SB37掘立柱建物跡P 1（南から）



8 SA38柱列跡P 1（南から）



1



1～2：SI01竪穴住居跡出土遺物

1：赤燒土器環

2：土師器高台環

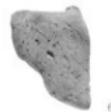
(scale 1 : 3)



3



4



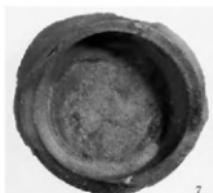
6



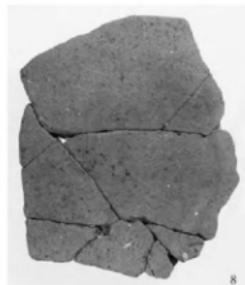
5 a



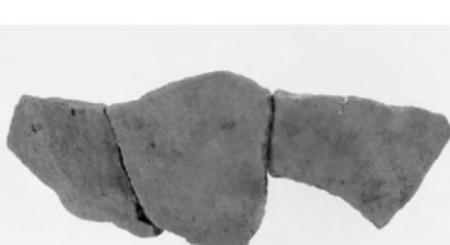
5 b



7



8



9



10

3～4：SI02竪穴住居跡堆積土

5～10：SI02竪穴住居跡床面

3～4：埴燒器環

5：軋用硯（←埴燒器壺）

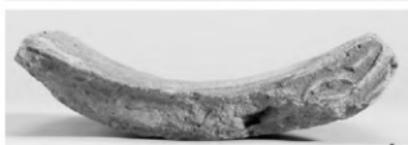
6：土師器環

7：埴燒器壺

8～9：被熱により赤変した埴燒器壺

10：砾石

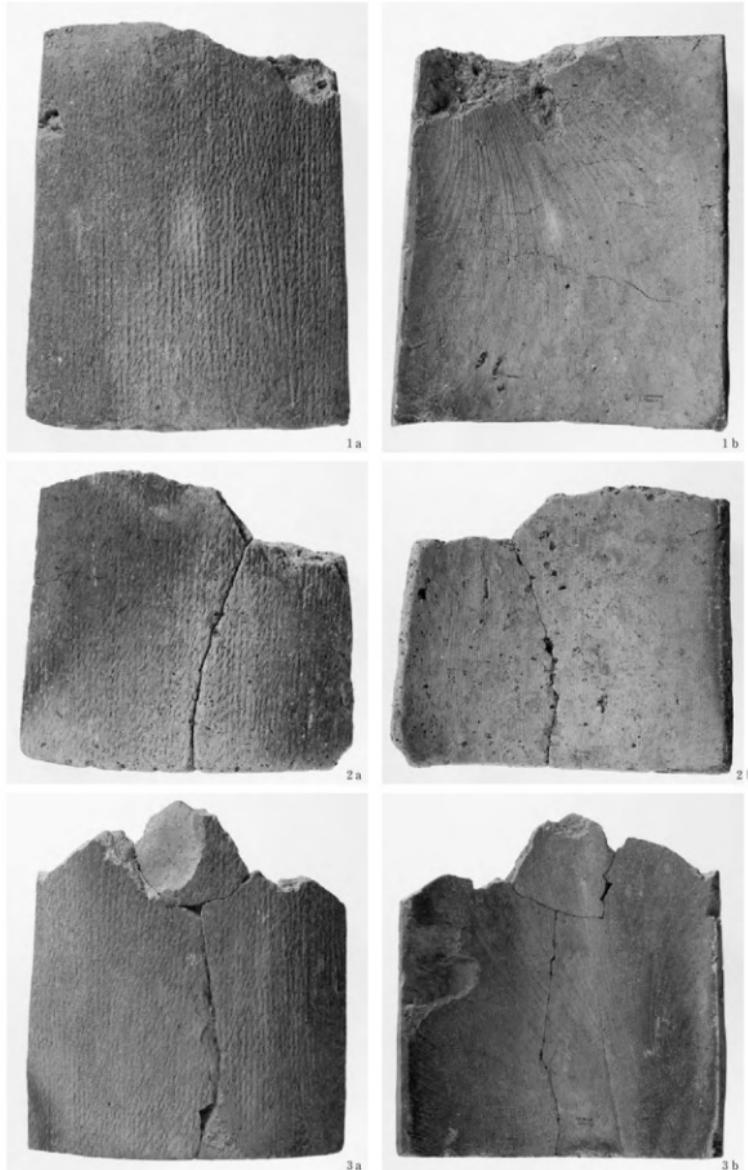
(scale 1 : 3)



SI02竪穴住居跡出土遺物（2）

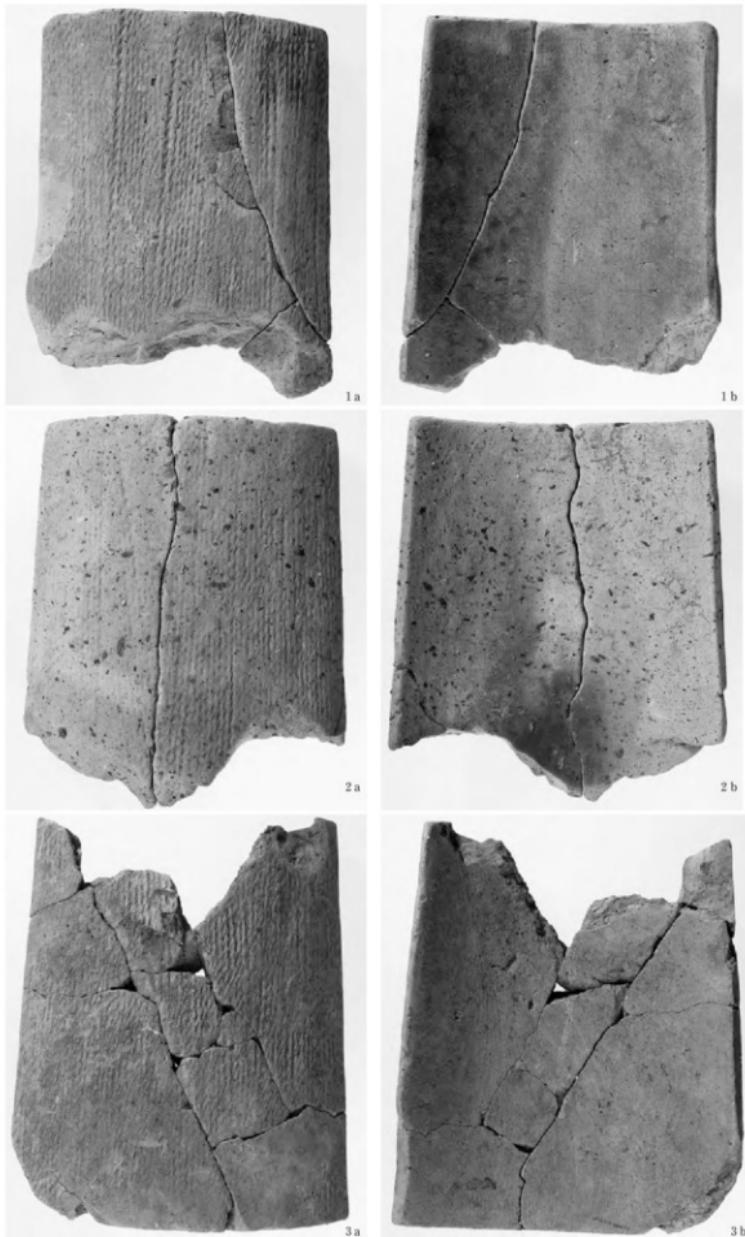
1～4：SI02竪穴住居跡カマド部暗渠
5：SI02竪穴住居跡暗渠

1～4：土師器甕 (scale 1 : 3)
5：軒平瓦 (scale 1 : 4)



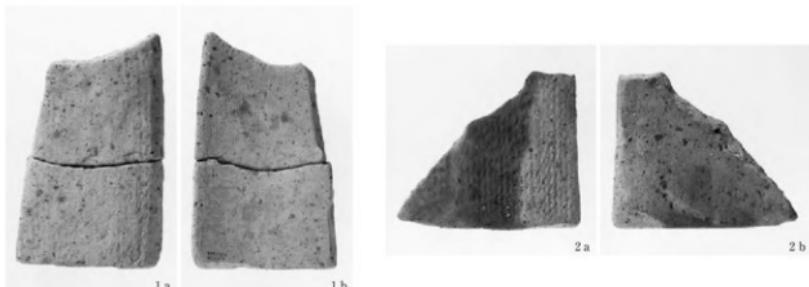
1～3：SiO₂堅穴住居跡暗渠 1～3：平瓦 (scale 1:4)

SiO₂堅穴住居跡出土遺物 (3)



1 ~ 3 : SI02竪穴住居跡暗渠 1 ~ 3 : 平瓦 (scale 1 : 4)

SI02 竪穴住居跡出土遺物 (4)

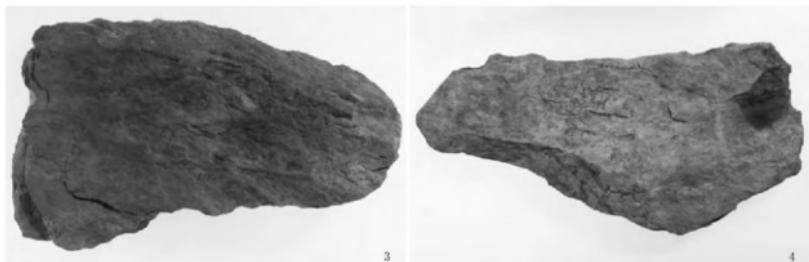


1 a

1 b

2 a

2 b



3

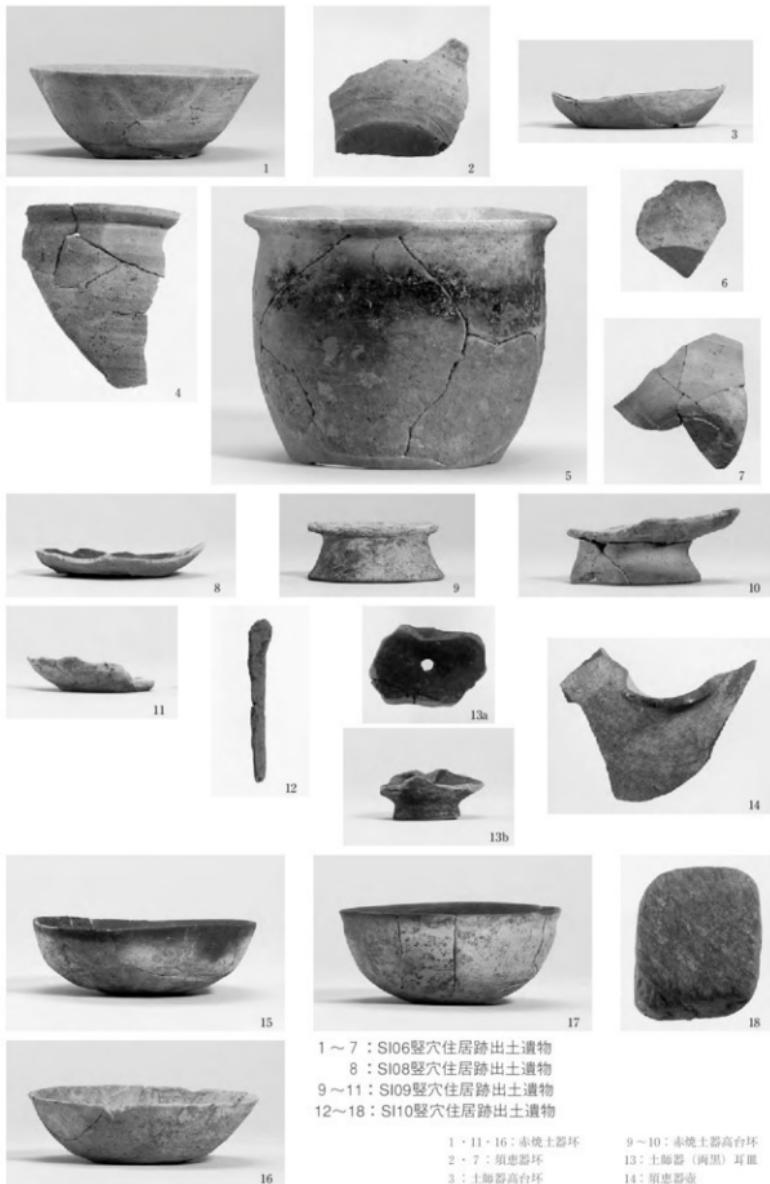
4

1 ~ 4 : SI02 壺穴住居跡暗渠 1 ~ 2 : 平石 3 ~ 4 : 平石 (scale 1 : 4)



5

5 : SI02 壺穴住居跡暗渠出土瓦
SI02 壺穴住居跡出土遺物 (5)



SI06・SI08・SI09・SI10竖穴住居跡出土遺物

1 ~ 11・16:赤燒土器环

2・7:須恵器环

3:土師器高台环

4~6:土師器堀

8・15・17:土師器环

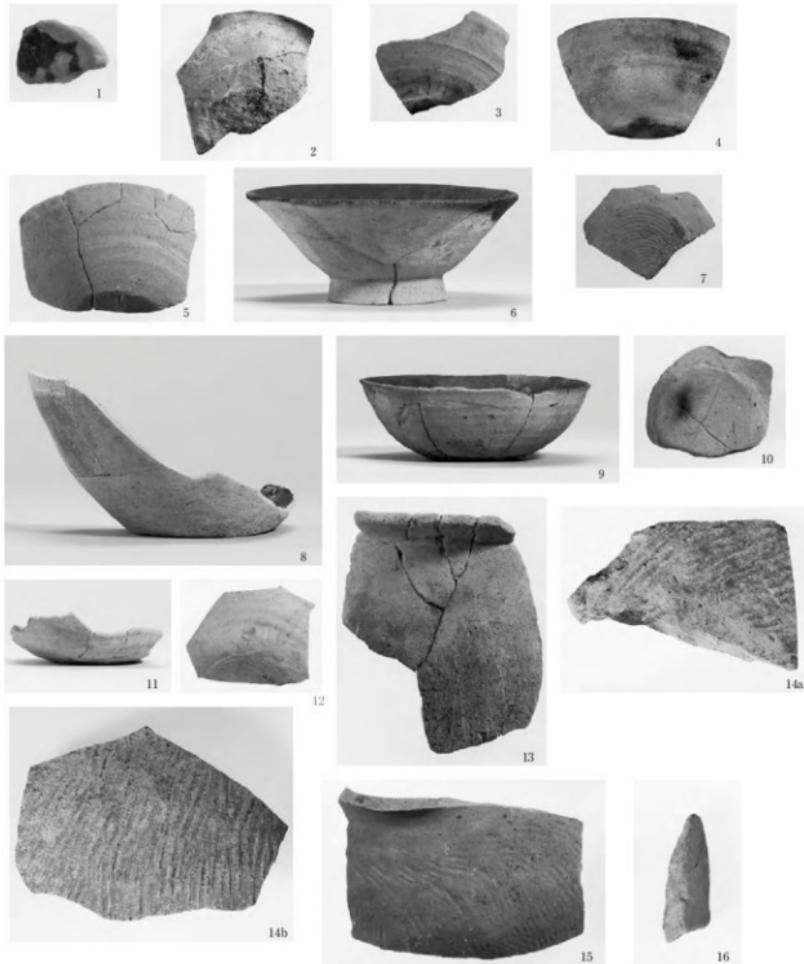
9~10:赤燒土器高台环

13:土師器(両面)耳皿

14:須恵器堀

12:鉄劍

18:磨石



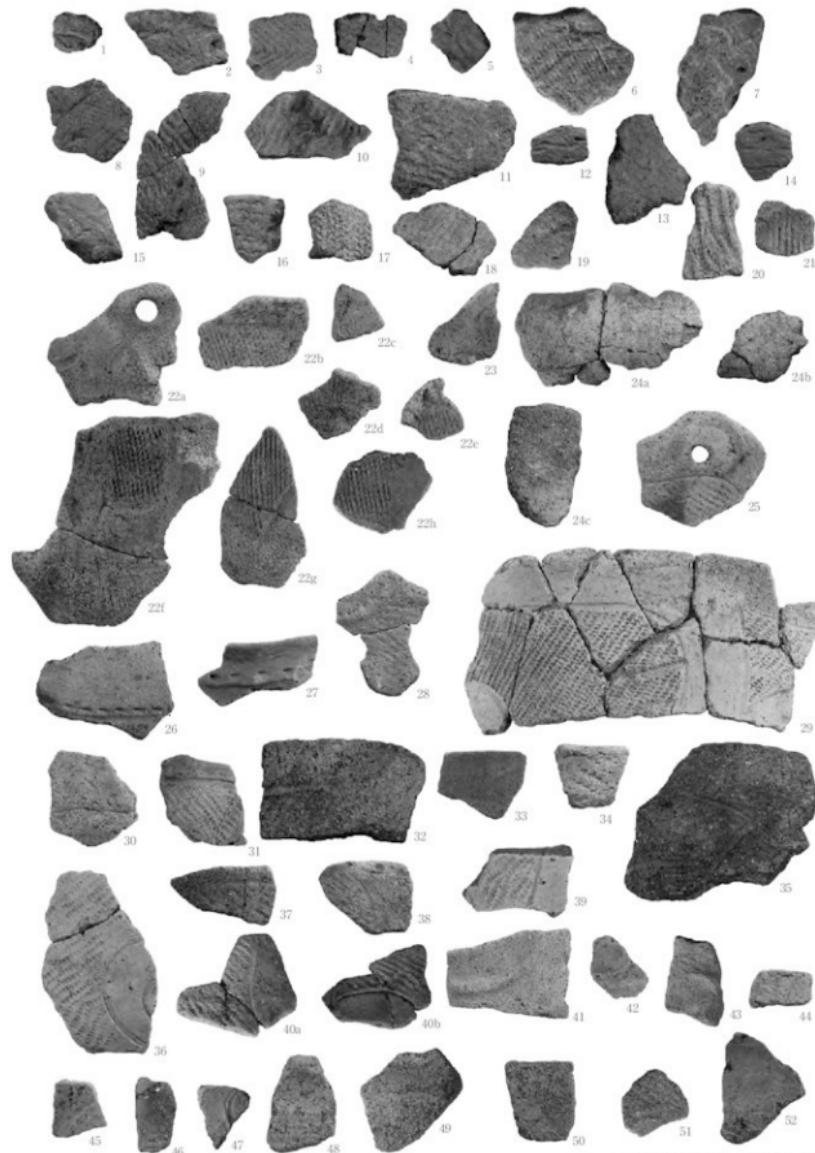
1 : SX05出土遺物
 2 ~ 3 : SK13土壤出土遺物
 4 ~ 8 : SK20土壤出土遺物
 9 ~ 16 : 遺構外の出土遺物
 1 ~ 2・4・9~10 : 土師器環
 5 : 赤燒土器环
 3・6 : 土師器高台环
 7・11~12 : 狹窓器环
 8 : 土師器鉢
 13 : 土師器要
 14~15 : 狹窓器甕
 16 : 砥石

その他の遺構・遺構外出土遺物



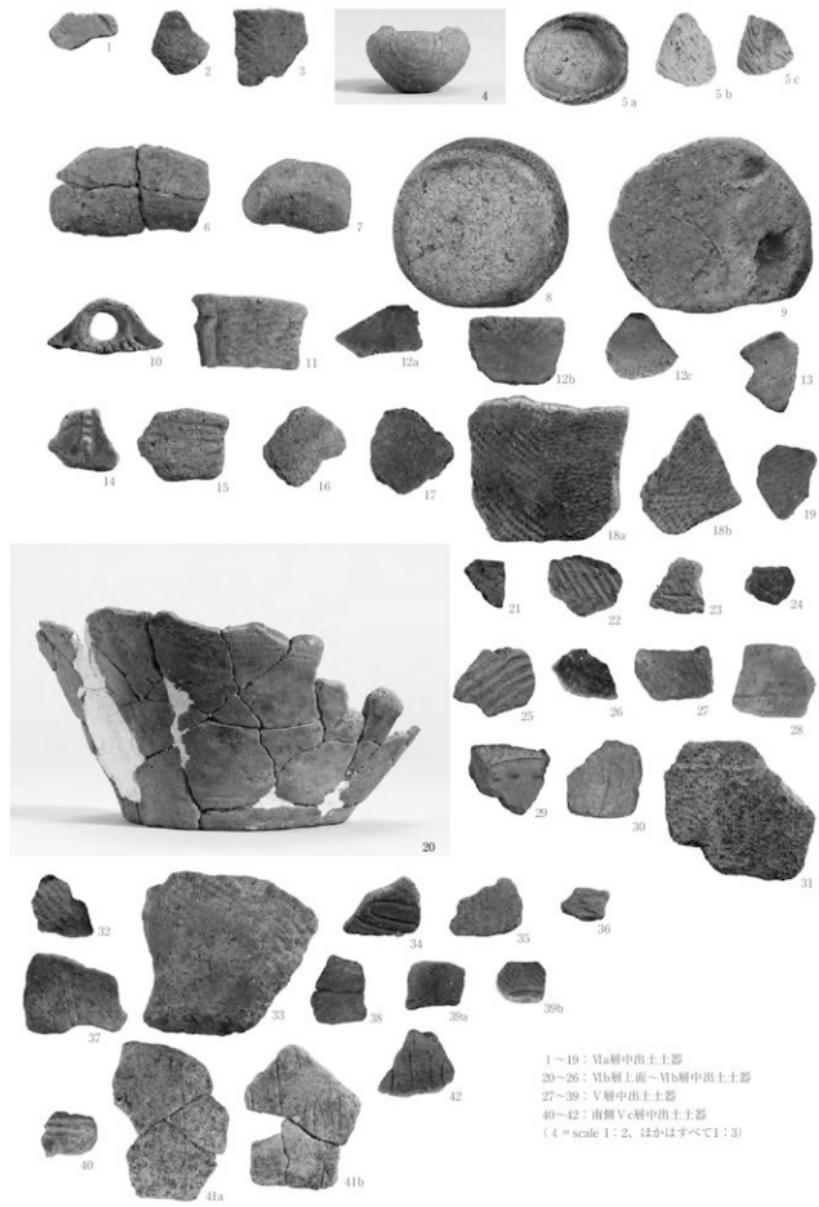
1~4：包1層中出土土器 5~12：包2層上面～2層中出土土器 13~22：包3層上面出土土器 (scale 1 : 3)

SX03遺物包含層出土土器



VI層出土土器

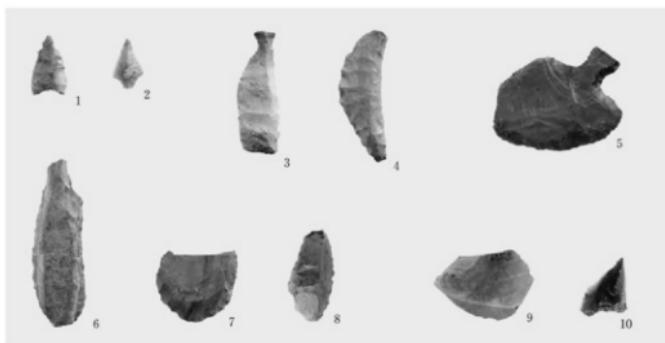
1~52: VIa層出土土器 (scale 1 : 3)





1 : SX23土器埋設遺構出土遺物

1 : 縄文土器 (scale 1 : 3)



1 ~ 10 : 縄文時代の石器

1 ~ 2 : 石頭

3 ~ 5 : 石頭

6 ~ 8 : 石頭

9 ~ 10 : 不定期石器

(scale 1 : 2)



1 : SX24墓壙出土遺物
2 : SD16溝跡出土遺物

1 : 古銭 (六道銭) (scale 1 : 1)
2 : 鉄釘 (scale 1 : 2)

土器埋設遺構・縄文時代の石器
中近世以降の遺構出土遺物

引用・参考文献

- 相原淳一 1990 「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年－仙台湾周辺の分層発掘資料を中心に－」『考古学雑誌』第76巻第1号 pp.1~65 日本考古学会
- 相原淳一 2003 「桃生郡河北町桃生城跡2003」「平成15年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨」宮城県考古学会
- 相原淳一 2004a 「桃生城跡－平成15年度調査の概要－」「第30回古代城柵官衙遺跡検討会」古代城柵官衙遺跡検討会
- 相原淳一 2004b 「すすむ三陸道建設 発掘調査から見える桃生町の歴史」平成15年度桃生町文化財講演会（町公民館）
- 相原淳一 2005 「宮城県における複式炉－考察の前提となる諸条件を中心に－」「有限責任中間法人日本考古学協会 2005年度大会 研究発表要旨」pp.24~26
- 吾妻俊典 2004a 「多賀城とその周辺におけるロクロ土師器の普及開始年代」「宮城考古学」第6号 pp.187~196 宮城県考古学会
- 吾妻俊典 2004b 「2003年の考古学界の動向－古代東北」「考古学ジャーナル」516 pp.107~109 ニューサイエンス社
- 吾妻俊典 2004c 「桃生城」「銀行俱楽部」第470号 pp.6~8 社団法人銀行協会銀行俱楽部
- 吾妻俊典 2004d 「多賀城外郭区画施設の強化とその契機」「東北文化研究所紀要」第36号 pp.95~106 東北学院大学
- 阿部義平 2003 「日本列島古代の城郭と都市」「国立歴史民俗博物館研究報告」第108集 pp.147~163 国立歴史民俗博物館
- 阿部正光・佐藤敏幸 1997 「宮城県の近世墓と六道銭」「近世の出土銭」兵庫埋蔵銭調査会
- 伊東信雄 1957 「古代史」「宮城県史」1 宮城県史編纂委員会
- 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」「歴史」第14輯 東北史学会
- 小笠原好彦 1976 「東北地方における平安時代の土器についての二、三の問題」「東北考古学の諸問題」pp.407~440
- 尾口雅史 2003 「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題」「日本律令制の展開」pp.421~456 吉川弘文館
- 小山正忠・竹原秀雄 1994 「新版 標準土色帖 1994年度版」
- 海峽土器編年研究会編 2004 「東北・北海道の縄文時代中期後葉の諸問題」第2回海峡土器編年研究会
- 加藤一孝 1961 「考古学上よりみた桃生村内の古代遺跡」「桃生村誌」附録 pp.1~18
- 加藤道男 1989 「宮城県における土師器研究の現状」「考古学論叢II」芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会
- 河北町誌編纂委員会 1975 「河北町誌」上巻
- 喜田貞吉 1922 「庄内と日高見（下）」「社会史研究」第9卷第2号 pp.189~208
- 興野義一 1957 「奈良平安朝における遠田郡」「仙台郷土研究」第17巻第1号 pp.45~51 仙台郷土研究会
- 興野義一 1996 「山内清男先生供与の大木式土器写真セットについて」「画龍点睛－山内清男先生没後25年記念論集－」pp.215~224
- 熊谷公男 2004a 「蝦夷の地と古代国家」日本史リブレット11 山川出版社
- 熊谷公男 2004b 「古代の蝦夷と城柵」「歴史文化ライブラリー」178 吉川弘文館
- 小井川和夫 2004 「里浜貝塚越地点出土土器の検討」「東北歴史博物館研究紀要」5 pp.17~52 東北歴史博物館
- 古代城柵官衙検討会編 2001 「第27回古代城柵官衙検討会－特集：桃生城と伊治城」「古代城柵官衙検討会資料
- 後藤勝彦 1956 「宮城県宮戸島里浜台貝塚の研究」「宮城県の地理と歴史」田邊一郎先生還暦記念論文集 pp.191~202 地域社会研究会編
- 後藤勝彦 1957 「陸前宮戸島里浜台貝塚出土の土器編年について」「塩竈市教育委員会教育論文」第2集 pp.1~6
- 後藤勝彦 2004 「南境貝塚調査の層位の成果 I 7トレンチの場合」「宮城考古学」第6号 pp.63~110 宮城県考古学会
- 後藤勝彦 2005 「宮城県宮城郡左道貝塚の調査－陸前地方前期縄文土器の編年学的研究（I）－」「宮城考古学」第7号 pp.89~114 宮城県考古学会
- 佐々木茂植 1972 「和泉古墳群－宮城県桃生郡河北所在－」宮城県桃生郡河北地区文化財調査報告第1集
- 佐藤巧 1992 「宮城県の古建築－江戸・明治期の建造物－」宮城県文化財調査報告書第151集
- 佐藤敏幸 2003 「律令国家形成期の陸奥国牡鹿地方（1）」「宮城考古学」第5号 pp.97~124 宮城県考古学会
- 佐藤敏幸 2004 「律令国家形成期の陸奥国牡鹿地方（2）」「宮城考古学」第6号 pp.139~158 宮城県考古学会
- 白鳥良一 1974 「仙台市三神峯遺跡の調査」「東北の考古・歴史論集」pp.1~54 平重道先生還暦記念会編
- 白鳥良一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」「研究紀要」Ⅶ pp.1~38 宮城県多賀城跡調査研究所

- 白鳥良一・阿部 恵・後藤秀一・佐藤和彦・古川一明・吾妻俊典・白崎恵介 2002「桃生城跡第1次～第10次発掘調査の概要」『考古学ジャーナル』494 pp.34～38 ニューサイエンス社
- 進藤秋輝・高野芳宏 1982「瓦塼類」「多賀城跡 政府跡本文編」宮城県多賀城跡調査研究所・宮城県教育委員会
- 進藤秋輝 2005「律令制支配と北上」『北上町史 通史編』pp.75～116 北上町史編さん委員会
- 菅原祥夫 2000「平安時代における蝦夷系土器の南下－蝦夷の移住をめぐって－」『阿部正光君追悼集』 pp.131～142 阿部正光君追悼集刊行会
- 須藤 隆 1969「第1号堅穴住居跡」「埋蔵文化財緊急発掘調査概報－長根貝塚－」 pp.26～36 宮城県文化財調査報告書第19集
- 須藤 隆 1985「東北地方における縄文集落の研究」「東北大考古学研究報告」1 pp.1～36 東北大考古学部考古学研究室
- 関根達人 2005「十腰内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ群土器」に関する今日的理解」「葛西 勲先生還暦記念論文集 北奥の考古学」pp.161～176 葛西 勲先生還暦記念論文集刊行会
- 瀬峰町教育委員会 1988「下藤沢Ⅱ遺跡－宮城県北部における奈良時代の住居跡・江戸時代の墓塚と墓標の調査－」
- 平 重道・志間泰治・白鳥良一・太田昭夫 1974「豊里町長根浦貝塚発掘調査報告」「豊里町史」下巻 pp.457～488 豊里町史編纂委員会
- 高橋誠明 2005「各都道府県の動向 宮城県」「日本考古学年報」56 pp.149～154 日本考古学協会
- 千葉宗久ほか 1999「地図で見る桃生町の歴史」くつわの会
- 榮館町教育委員会 2005「鍛沢遺跡」榮館町文化財調査報告書第18集
- 辻 秀人 2006「北上川流域の古代社会－蝦夷の土器・蝦夷の墓－」東北学院大学オープンリサーチセンター公開集中講座
- 東北歴史資料館 1989「宮城県の貝塚」東北歴史資料館資料集25
- 永井久美男編 1994「中世の出土銭－出土銭の調査と分類－」兵庫埋蔵銭調査会
- 芳賀良光 1968「宮城県宮戸島貝塚梨木岡遺跡の研究」「仙台湾周辺の考古学的研究」 pp.45～53 宮城教育大学歴史研究会
- 追町教育委員会 2005「坂戸遺跡」追町文化財調査報告書第4集
- 羽柴直人 1997「岩手県平泉町における近世掘立柱民家について－泉屋遺跡、志羅山遺跡の事例を中心に－」「紀要XVII 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 早瀬亮介 2005「阿武隈川下流域における縄文時代前期初頭の土器型式」「歴史」第104輯 pp.82～107
- 藤沼邦彦・神宮寺千恵 1992「宮城県における一括出土の渡来銭－女川町御前浜出土の古銭を中心にして－」「研究紀要」第18巻 東北歴史資料館
- 町田 洋・新井房夫 2003「新編アトラス－日本列島とその周辺」東京大学出版会
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1975「桃生城跡」I 多賀城跡関連道路発掘調査報告書第1冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1976「桃生城跡」II 多賀城跡関連道路発掘調査報告書第2冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1995「宮城県多賀城跡調査研究所年報1994 多賀城跡」
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1995「桃生城跡」III 多賀城跡関連道路発掘調査報告書第20冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1996「桃生城跡」IV 多賀城跡関連道路発掘調査報告書第21冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1997「桃生城跡」V 多賀城跡関連道路発掘調査報告書第22冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1998「桃生城跡」VI 多賀城跡関連道路発掘調査報告書第23冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1999「桃生城跡」VII 多賀城跡関連道路発掘調査報告書第24冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2000「桃生城跡」VIII 多賀城跡関連道路発掘調査報告書第25冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2001「桃生城跡」IX 多賀城跡関連道路発掘調査報告書第26冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2002「桃生城跡」X 多賀城跡関連道路発掘調査報告書第27冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2003「亀岡道路」I 多賀城跡関連道路発掘調査報告書第28冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2004「亀岡道路」II 多賀城跡関連道路発掘調査報告書第29冊
- 宮城県教育委員会 1970「日の出山窪跡群－埋蔵文化財調査概報－」宮城県文化財調査報告書第22集
- 宮城県教育委員会 1988「大梁川・小梁川遺跡」宮城県文化財調査報告書第126集

- 宮城県教育委員会 2002『沢田山西遺跡－三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅰ－』宮城県文化財調査報告書第189集
- 宮城県教育委員会 2003『新田東遺跡－三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅱ－』宮城県文化財調査報告書第191集
- 宮城県教育委員会 2004『沢田山西遺跡はか－三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅲ－』宮城県文化財調査報告書第196集
- 宮城県教育委員会 2004『桃生城跡』『宮城考古学』第6号 p.337 宮城県考古学会
- 宮城県教育委員会 2005『角山遺跡－三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅵ－』宮城県文化財調査報告書第200集
- 宮城県教育委員会 2005『袖沢古墳群』『壇の越遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第202集
- 村田晃一 2003『奈良時代後半から平安時代初期の城柵』第23回般夷研究会資料 岩手大学
- 村田晃一 2004『三重構造城柵論－伊治城の基本的な整理を中心として 移民の時代2－』『宮城考古学』第6号 pp.159～186 宮城県考古学会
- 村田晃一 2005「7世紀における陸奥北辺の様相－宮城県域を中心として－」『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』pp.351～367 日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会
- 松本秀明 1996「石巻の地形環境」「石巻の歴史」第1巻 pp.7～13 石巻市編さん委員会
- 桃生郡河北地区教育委員会 2003「古代跡奥国、海道の拠点 桃生城跡～東北38年戦争はじまりの地～」
- 桃生郡教育会 1923『桃生郡誌』全 桃生郡役所
- 桃生町史編纂委員会 1988『桃生町史』第2巻 資料編
- 桃生町史編纂委員会 1990『桃生町史』第3巻 自然・民俗編
- 桃生町史編纂委員会 1996『桃生町史』第5巻 通史編
- 桃生村誌編纂委員会 1961『桃生村誌』宮城県桃生町役場
- 山口博之 1999「墓塚から出土した中世の東北・北海道地方で葬送の時に使用したと思われる鉄は」「東北地方の中世出土貨幣－東北中世考古学会第5回研究集会資料集－」pp.598～614 東北中世考古学会
- 山内清男 1937「繩紋土器型式の細別と大別」「先史考古学』第1巻第1号 pp.29～32 先史考古学会
- 山内清男 1961「日本先史土器の繩紋」（京都大学提出学位請求論文－没後、1979年に夫人により先史考古学会から出版）
- 吉田康之 2004『宮城県室浜貝塚出土資料の研究－角田コレクション紹介3－』『名古屋大学博物館報告』第20号 pp.55～60 名古屋大学博物館

報告書抄録

ふりがな	ものうじょうあと ほそやBいせき							
書名	桃生城跡 細谷B遺跡							
副書名	三陸縦貫自動車道建設関連調査報告書V							
卷次								
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第205集							
編著者名	相原淳一							
編集機関	宮城県教育委員会							
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町三丁目 8-1 TEL 022-211-3682							
発行年月日	西暦2006年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド		北緯 日本測地系 (改正前)	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
桃生城跡	宮城県 石巻市 飯野字 稚畠	市町村 042021	遺跡番号 66004	38° 31' 58"	141° 16' 58"	確認調査 2002.12.19-25 事前調査 2003.4.10~6.6	約1,500	三陸縦貫自動車道建設に伴う事前調査
細谷B遺跡	宮城県 石巻市 桃生町 太田字細谷	042021	70028	38° 32' 44"	141° 16' 30"	確認調査 2003.3.17~19 事前調査 2003.11.12~ 12.11	約900	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
桃生城跡	城柵	古代	溝跡3条・土塁 跡1条・土塹1基・竪穴住居跡 3軒	土師器・須恵器		今回発見された遺構群は、桃生城跡全体の規模と構造、変遷の解明に向けての端緒となる重要なものである。		
細谷B遺跡	集落跡	縄文時代・ 古代・中近世以降	土器埋設遺構1基・遺物包含層 1箇所・竪穴住居跡6軒・墓壙 1基・掘立柱建物跡11棟以上・ 柱列跡1条	縄文土器・石器（前期・中期・後期）、土 師器・須恵器・軒用 硯・赤焼土器・瓦・鉄 鋤・砥石・磨石・鉄 釘・古銭（「太平通寶」を含む六道錢）		SI02竪穴住居跡の暗渠に用いられた瓦は桃生城跡、宗全山遺跡出土のものと同様のものである。		

宮城県文化財調査報告書第205集

桃生城跡 細谷B遺跡

—三陸縦貫自動車道建設関連道路調査報告書V—

平成18年3月25日印刷

平成18年3月31日発行

発行 宮城県教育委員会

仙台市青葉区本町三丁目8番1号

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町24-24
